

教材発掘・歌人吉野秀雄

—— 芸術と愛に生きる ——

国語科教諭 鈴木 芳明

序 章

はじめに…消えゆく吉野秀雄

本年度（平成17年7月現在）本校に送られて来た、平成18年度（2006年度）審査用教科書見本は、国語総合の教科書が8社9冊、同じく現代文が8社12冊でした。しかし、それらの教科書の短歌を扱った教材の中に、吉野秀雄の名前を見つけ出すことはできませんでした。

もちろん上記21冊の教科書は、審査用教科書見本のすべてではありませんし、その一部にすぎないのですが、おそらく他の見本であっても結果は同じなのではないかと推測されます。

新課程になり、国語科の単位数が、各学年とも他教科同様に減単され、高校の授業の中で、短歌や俳句にまで時間を割くのがなかなか難しくなってきたことは確かですが、しかし上記の教科書の中に、短歌や俳句を一つも載せていない教科書があったことには驚かされました。

ただ、ほとんどの教科書では、明治から現代までの歌人や俳人の歌や句が、少ないながらもそれなりに工夫されて載せられていました。だいたい、5～12人ぐらいの歌人や俳人の代表作を、一つか二つずつ紹介するといった形式のものが多かったようです。

おそらく吉野秀雄は、教科書に載せるそういった近現代を代表する5～12人の中には入らないだろうということで、近年採用されなくなったのではないかと思います。与謝野晶子や石川啄木や斎藤茂吉ほどメジャーではなく、寺山修司や馬場あき子や俵万智ほど現代的ではない、といったところが、近年吉野秀雄が敬遠されてきた理由ではないかと思われま

ところで、上記21冊の審査用教科書見本に関してだけですが、もう少し詳しく調べてみると、国語総合の教科書に掲載されている歌人は21人、現代文の教科書にいたっては実に59人もの歌人の歌が紹介されていました。しかし、それらの中にさえも吉野秀雄が登場してこないとなると、これはちょっと考えざるをえなくなってしまいます。はたして吉野秀雄は、高校で教えられなくてもよい歌人なのだろうかというのが、この文章を書こうとしたきっかけです。

高校の国語の授業で教えられなくなれば、おそらくは、ほとんどの人が吉野秀雄という歌人の存在を知らなくなることでしょう。それどころか現実的には、既によほどの短歌愛好家か研究者でなければ、吉野秀雄の名前は知られていないのかも知れません。

平成14年（2002）10月～11月にかけて、横浜の港の見える丘公園内にある神奈川近代文学館で、吉野秀雄の生誕100年記念展が開催されたのですが、その時の担当者も、吉野秀雄が既に人々から注目されなくなってしまったことを嘆いていたのが、とても印象的でした。

吉野秀雄を偲んで、毎年7月の第1週の土曜日には、鎌倉二階堂の瑞泉寺ずいせんじで、艸心忌そうしんきが開催されています。第38回目を数える今回（平成17年7月2日）は私も参列させていただきましたが、参加者数は年々減少し、しかもその参加者が年々高齢化しつつある感は、正直言っていなめません

でした。同じ瑞泉寺で、毎年9月に開催される山崎方代の方代忌が、年々盛大になって、若い人々の姿も垣間見られる現状とは、まさに好対照の様相を呈していました。

話は変わりますが、たとえば、小林秀雄の『考えるヒント』や森本哲朗の『ことばへの旅』などは、かつては高校の国語の教科書の定番の教材で、だいたいはこの教科書でも採用されていたのではないかと思います。しかし、今ではほとんど見ることはできなくなりました。

文芸評論家に関して言えば、前述した二人以外では、中村光夫、福田恆存、花田清輝、大岡昇平、平野謙、吉田健一、秋山駿などといった戦後を代表する文芸評論家の文章も、最近の教科書では、ほとんど採用されなくなりましたし、私自身も近年授業で扱った記憶はほとんどありません。芥川龍之介の『羅生門』、夏目漱石の『こころ』とともに御三家?のひとつであった森鷗外の『舞姫』なども、最近では定番の教材からはずれつつあるようです。

教科書であっても、特に現代文の教科書に載せるような教材は、高校生を取り巻く社会や環境の変化、その時代その時代の問題意識や時流の変化等から少なからず影響を受けますので、教材が変わっていくのは、ある意味では当然であり、ある意味では妥当であるとも言えます。今の高校生にとって、より親しみやすい、最近の売れっ子作家の作品を採用したくなるのも、わからないわけではありません。鷗外や小林秀雄といった大家の文章が採用されなくなるのであれば、彼らほど有名ではない吉野秀雄の歌が、高校の国語の教科書から消えてしまうのも、これもまたいたしかたないところなのかもしれません。

しかし、音楽高校に勤務する私が、特に韻文を重視したいということももちろんあるのですが、吉野秀雄の歌が提示するテーマや彼の芸術に対する考え方、そして彼が人生をどのように生きてきたかということに関しては、音楽高校生のみならず、現代の高校生全般に対しても、十分に通用する説得力を有しているのではないかと思います。

今回この文章で私が強調したかったことは、そういう消えゆく一歌人を惜しもうとしているわけではありません。もっと積極的な意味において、吉野秀雄の歌を授業に活用できるのではないかと思ったからです。特に、吉野秀雄の最初の妻であるはつ子に先立たれる際に、最愛の妻の最期を看取らなければならなくなった夫の痛哭の思いを詠んだ歌や、まだ幼い兄弟が、お互いを励ましながら母の脛をさすることで、懸命になって消えゆく母の命をつなぎ止めようとする様子を詠んだ歌や、あるいは、はつ子が死ぬ間際に、夫と今生の別れを告げた後に、夫に烈しく抱擁を求めてくる場面を描写した一連の歌などは、私見ながら、おそらくは戦後短歌の最高峰に位置するのではないかと思います。

人間存在の根源に関わる諸問題を提示した、吉野秀雄のこれらの歌を、高校生にもぜひ詠んでもらいたいと思って、今回この文章を書きました。

なお、今回引用した歌の出典は、平成14年(2002)、短歌研究社発行『増補改訂版 吉野秀雄全歌集』に拠りました。仮名遣いについては、現代仮名遣いに直すべきかどうか悩みましたが、今回は歴史的仮名遣いのままにしました。その代わりルビは、小学校で学習する漢字1006字以外はできるだけつけることにして、少しでもわかりやすくなるように配慮しました。歌の右側には、出典の歌集名と歌番号(『増補改訂版 吉野秀雄全歌集』の歌番号と同じもの)を、算用数字でつけました。

第一章 高校生に伝えたい珠玉の20首

※教材としての一例…歌集『寒蟬集』より抜粋

- | | | |
|---|--------------|------|
| 1. 古量 <small>ふるだたみ</small> を蚤 <small>のみ</small> のはねとぶ病室 <small>な</small> に汝 <small>な</small> がたま <small>を</small> の緒 <small>を</small> は細りゆくなり | (『寒蟬集』「玉簾花」) | 1100 |
| 2. 病む妻 <small>あしくび</small> の足頸 <small>あしくび</small> にぎり昼寝 <small>ひぐらし</small> する末 <small>な</small> の子 <small>な</small> をみれば死 <small>な</small> しめがたし | (同) | 1105 |
| 3. 生 <small>な</small> かしむと朝 <small>あさ</small> を勢 <small>いきほ</small> へど蝸 <small>ひぐらし</small> の啼 <small>な</small> くゆふべにはうなだれてをり | (同) | 1109 |
| 4. 額 <small>ひたひ</small> 冷 <small>ひや</small> やすタオル <small>はし</small> の端 <small>な</small> に汝 <small>な</small> がなみだ <small>な</small> ふきやりてはたわが涙 <small>な</small> 拭 <small>ふ</small> く | (同) | 1110 |
| 5. 坐 <small>すわ</small> りてはをりかぬればぞ立 <small>た</small> 上 <small>あ</small> り苦 <small>くる</small> しむ汝 <small>な</small> をわれは見 <small>み</small> おろす | (同) | 1112 |
| 6. 幼子 <small>をさなご</small> は死 <small>な</small> にゆく母 <small>は</small> とつゆ知 <small>し</small> らで釣 <small>つ</small> りし魚 <small>うを</small> の魚 <small>びく</small> 籠 <small>のぞ</small> を覗 <small>のぞ</small> かす | (同) | 1113 |
| 7. をさな子の服 <small>な</small> のほころび <small>な</small> を汝 <small>な</small> は縫 <small>ぬ</small> へり幾 <small>いく</small> 日 <small>ひ</small> か後 <small>のち</small> に死 <small>な</small> ぬとふものを | (同) | 1121 |
| 8. 生 <small>な</small> きのこるわれをいとしみわが髪 <small>かみ</small> を撫 <small>な</small> でて最 <small>いま</small> 期の息 <small>いき</small> に堪 <small>た</small> へにき | (『寒蟬集』「彼岸」) | 1216 |
| 9. 信 <small>しん</small> ずれば子 <small>こ</small> らを頼 <small>た</small> むといまさらにあ <small>あ</small> にい <small>い</small> はめやといひて死 <small>な</small> にけり | (同) | 1217 |
| 10. 真命 <small>まいのち</small> の極 <small>きは</small> みに堪 <small>た</small> へてしむら <small>ら</small> を敢 <small>あ</small> てゆだねしわ <small>わ</small> ぎも子 <small>こ</small> あはれ | (同) | 1218 |
| 11. これやこの一期 <small>いちご</small> のいのち <small>ほむらだ</small> 炎 <small>な</small> 立ちせよと迫 <small>せま</small> りし吾妹 <small>わぎも</small> よ吾妹 <small>わぎも</small> | (同) | 1219 |
| 12. ひしがれてあいろもわか <small>な</small> ず墮 <small>だ</small> 地獄 <small>ぢごく</small> のやぶれかぶれに五体 <small>ごたい</small> 震 <small>ふる</small> はす | (同) | 1220 |
| 13. 今生 <small>こんじやう</small> のつひのわか <small>な</small> れを告 <small>つ</small> げあひぬうつろに迫 <small>せま</small> る時のしづもり | (『寒蟬集』「玉簾花」) | 1124 |
| 14. 遮蔽燈 <small>しゃへいとう</small> の暗 <small>ほ</small> き燈 <small>あかり</small> かげにたま <small>たま</small> きはる命 <small>いのち</small> 尽 <small>つ</small> きむとする妻 <small>つま</small> と在 <small>あ</small> り | (同) | 1125 |
| 15. をさな児 <small>こ</small> の兄 <small>おとと</small> は弟 <small>いまは</small> をはげまして臨終 <small>りんしゆう</small> の母 <small>はは</small> の脛 <small>すね</small> さすりつつ | (同) | 1126 |
| 16. 母 <small>はは</small> の前 <small>まへ</small> を我 <small>われ</small> はかまはず緋 <small>なれ</small> 切れし汝 <small>な</small> の口 <small>くちづ</small> びるに永 <small>くちづ</small> く接吻 <small>くちづ</small> く | (同) | 1127 |
| 17. 隣室 <small>りんしつ</small> の患 <small>はげ</small> 者 <small>な</small> 憚 <small>はば</small> り声 <small>こゑ</small> あげて泣 <small>な</small> きも得 <small>え</small> せずて苦 <small>くる</small> しよわれは | (同) | 1128 |
| 18. 亡骸 <small>なきがら</small> にとりつきて叫 <small>な</small> ぶをさならよ母 <small>はは</small> を死 <small>な</small> しめて申 <small>まう</small> 訳 <small>しわけ</small> もなし | (同) | 1131 |
| 19. いのちありて汝 <small>なれ</small> が作り <small>たうなす</small> し南瓜 <small>ななす</small> とトマト <small>そな</small> 供 <small>とむら</small> へて葬 <small>むす</small> ひをなす | (同) | 1149 |
| 20. 子供部屋 <small>たいこ</small> に忘 <small>わ</small> れられし太鼓 <small>たいこ</small> とりいでて敲 <small>たた</small> ちうつこころ誰 <small>たれ</small> 知るらめや | (同) | 1181 |

以上の20首の歌は、いずれも吉野秀雄の歌集『寒蟬集』の中に収められている、彼の代表作です。初出は、1946年（昭和21）12月小林秀雄が実質的な編集長を務めていた、文芸誌『創元』の創刊号に発表された「短歌百余章」です。『創元』は、定価百円という、当時としては極めて豪華な雑誌でした。

この「短歌百余章」は、吉野秀雄の名を一躍世に知らしめた作品でもありました。

鎌倉アカデミアで、吉野秀雄に万葉集の講義を聴いていた山口瞳は、『小説・吉野秀雄先生』の中で、「短歌百余章」の歌に関する次のようなエピソードを紹介しています。

『創元』の実質的な編集長であった小林秀雄さんは、この原稿を受けとって、読み終わるなり、凄あつい勢いきほいで山やまを駆かけおりにてきて、吉野秀雄先生の門かどを叩たたき、こう言ったというのである。

「このなかに八首だけよくない歌がある！」

つまり、あとの歌は、全部いい、全部傑作であるという意味だったのである。

(山口瞳著『小説・吉野秀雄先生』文芸春秋 1969年発行)

そして、吉野秀雄の歌集『寒蟬集』の中から、特に今の高校生に詠ませたいものとして選んだものが、上記の20首の歌です。吉野秀雄と妻はつ子との死別を詠んだ連作の歌の中から、私自身が、授業で生徒に紹介するために、ふさわしい歌として選んだものです。もちろんこの歌集『寒

『寒蟬集』の中には、ほかにもたくさん良い歌がありますし、吉野秀雄の他の歌集の中にも、ふさわしい歌はたくさんあるのですが、それらの歌については、随時プリント等で補足して紹介していけばよいのではないかと思います。

ただ、歌の並べ方については、時間の流れに沿った方がわかりやすいのではないかと思います、私自身が歌の順番を若干並べ替えました。「玉簾花」の途中に、「彼岸」が混じっているのは、そのためです。

歌の具体的な内容に関しては、後の「第三章 20首の歌の作品鑑賞」の項で説明していきたいと思います。

さて、先に掲げた歌集『寒蟬集』の20首の歌は、最愛の妻はつ子の、入院から臨終に至るまでの様子を赤裸々に描いた、吉野秀雄渾身の挽歌です。詠む者を、まさにぐいぐいと引き寄せて離さない迫力があるのではないかと思います。かつて、愛する妻の臨終の場面を詠んだ歌として、これほど美しい作品があったでしょうか。

高村光太郎「レモン哀歌」、宮沢賢治「永訣の朝」、斎藤茂吉「死にたまたま母」などの作品と共に、今の高校生にも、ぜひとも詠ませたい歌ではないかと、私は思っています。

吉野秀雄からすれば、病弱で何度も死の淵をさまよっていた自分よりも、まさか妻の方が先に逝くなどということは、よもや思わなかったことでしょう。一方妻の方にしてみても、病弱な夫やまだ幼い子ども達四人を残して一人先立つことは、さぞ無念なことであつたろうと思われれます。

20首の歌の中には、最愛の妻の死に直面して、どうすることもできずにうろたえる夫の痛哭。病苦に堪えながらも、残される夫や子ども達のことを、逆に気遣う妻のけなげさ。母が死ぬという現実を理解できずに、母のそばから離れようとせず、「足躰」をにぎりながら居眠りをする末の子のいたいけなさ。母の臨終の姿を目の当たりにして、兄が弟を励まししながら、「母の脛」をさすることで、消えゆく母の命を、必死になつてつなぎ止めようとしている兄弟のいたましさといった事柄を詠んだ歌がありますが、これらの歌に対しては、高校生たちもきっと万感の思いで詠み取ってくれることでしょう。

最愛の妻の臨終に際してうごめく、さまざまな人間の感情を、吉野秀雄がこれらの歌を通して、もの見事に描き切っていることに、私達はまずもって驚かされるのではないのでしょうか。

そして、そういう子ども達の姿や死にゆく妻の姿、そしてなすすべもなく狼狽する夫の姿を、これまた客観的に眺めるもう一つの歌人の目が存在することに、私達はさらに気がつきます。

芸術の最も大切な要素に、ヒューマニズムがあるかと思いますが、これらの歌は、人間とは何か、家族とは何か、愛とは何か、そして、命とは何なのかという大問題を、私達に突きつけます。そういった問題を考えさせる教材として、吉野秀雄の歌は十分に優れているのではないのでしょうか。まさに、高校生の教材として、うってつけではないかと私は思っています。

第二章 20首の歌の背景

第一節 若き日の吉野秀雄

1. 発病まで

吉野秀雄は、1902年(明治35)、群馬県高崎市に生まれました。父藤一郎、母サダ(旧姓 籾)の8人兄弟の二番目の子ども(次男)でした。祖父藤作が開業した絹織物問屋を、父藤一郎が発展させて、その後日本橋に株式会社吉野藤を築き上げるまでになりますが、秀雄が生まれたのは、

父藤一郎が高崎に支店絹織物問屋・吉野呉服店を出していた頃のことでした。秀雄は、わりと裕福な家に育ちました。

家が商家であったことから、兄弟たちはみな、実業に就くか、その方面の人へ嫁することを当然のように思っていたことが、『^{そうしんどう}艸心洞雑記』所収「少年の頃」（筑摩書房『吉野秀雄全集』第五卷、昭和44年発行）の話の中に載っています。秀雄は、実は小学校へ上がると同時に、両親のいる高崎から、祖父母のいる富岡の地へ兄と共に預けられていたのですが、1915年（大正4）13歳の時に、おそらくは家業を継ぐための教育を受けさせるために、再び高崎の両親の許に戻されて、高崎商業に入学しました。

小学校から高校までを首席で通し、優秀であった秀雄は、両親の期待を受けて、その後1920年（大正9）18歳の時に、慶応義塾理財科予科に入学しました。1922年（大正11）20歳の時には、そのまま慶應義塾大学経済学部へ進学しますが、翌1923年（大正12）9月には、日本中を震撼させる関東大震災がおきました。その頃、東京に支店を出すまでに発展していた吉野藤東京支店は、そのために全焼してしまいました。秀雄は、情報収集のため日夜奔走するのですが、その際の無理がたたったせいも、関東大震災のおこった翌年1924年（大正13）3月4日に、下宿で^{かっけつ}咯血してしまいました。秀雄22歳のことでした。驚いた吉野秀雄は、父藤一郎とともに、駿河台の杏雲堂医院を訪れますが、診察した佐々木院長から、右肺尖カタル（結核の前駆症状）であると告げられてしまいました。秀雄は、翌日すぐに下宿を引き払い、高崎に帰郷します。

これが、長年にわたる秀雄の療養生活の始まりでした。1967年（昭和42）65歳で亡くなるまで、秀雄はその後、肺結核・^{ぜんそく}気管支喘息・糖尿・リュウマチといった重い病気を次々と併発し、実に半世紀近くにわたり、ずっと病気に苦しめられ続けたのでした。

2. はつ子との出会い

吉野秀雄は、前述したように、22歳の時に肺尖カタルを発病しました。すぐに慶應義塾大学を中途退学して、高崎に帰郷しましたが、その後病気は、^{ろくまくえん}乾性肋膜炎を経て、さらに肺結核へと進行してしまいました。肺結核は、当時多くの若者を死に至らしめる恐ろしい病気でした。しかし、吉野秀雄の最初の妻はつ子は、そんな苦労を承知の上で、秀雄のもとへ嫁いで来たのでした。

はつ子は、旧姓を栗林はつ子といます。秀雄とは群馬県富岡尋常小学校の同級生同士で、小学校2年生の時に、二人は初めて出会いました。はつ子は、吉野と同様に級長を務めるなど利発な少女でした。秀雄は、はつ子をすぐに見初めますが、なかなか自分の気持ちを伝えることができませんでした。

その後、吉野秀雄は高崎商業へ、はつ子は、高崎高等女学校へと進学しました。

1920年（大正9）慶応義塾理財科予科に入学した吉野秀雄は、既に18歳になっていました。小さい頃からずっとはつ子のことを思い続けていた秀雄は、同年11月25日、遂に偽名まで使って、はつ子に最初の手紙を送っています。その手紙の中には、今まで思っていたはつ子に対する恋心が切々と訴えられていて、最後にはつ子の「^た真心が聞き度い」の文句で手紙が結ばれています。吉野秀雄が手紙を出してから4日後の11月29日に、はつ子からも返事が届きます。はつ子も秀雄のことを恋しているという内容でした。

こうして、お互いの気持ちは確認できたものの、今のように自由恋愛が許される時代ではありませんでしたので、二人はなかなか会うことができませんでした。春休みに、はつ子の郷里であり、秀雄の祖父母のいる場所でもある富岡へ行った際にも、周囲の目が気になり、二人は結局会えないまま、むなしく富岡を離れたのでした。

我慢できなくなった吉野秀雄は、遂にはつ子に対する思いを父藤一郎に打ち明けます。秀雄の気持ちを聞いた藤一郎は、1921年（大正10）9月、はつ子の実家である栗林家へ、二人の交際の許可を得るための訪問をしています。こうして、秀雄とはつ子は、両家の認める仲となりました。

以上のように、吉野秀雄とはつ子は、幼なじみでもあり、そして早くからお互いの将来を誓い合った仲でもありました。

1922年（大正11）4月、吉野秀雄は慶應義塾大学経済学部に進学しましたが、はつ子も日本女子商業学校に入学し、秀雄とともに上京しています。

1923年（大正12）秀雄21歳の年は、発病する前の年です。吉野秀雄は、11月頃から正岡子規の『だっさいしょおくはいわ瀬祭書屋俳話』『竹乃里歌全集』を読み、はつ子に子規旧居の住所を調べてもらったりしています。同年12月子規旧居を訪れた吉野秀雄は、子規の妹律から子規の話を聞いたり、子規の遺墨を見て感動しています。この体験から秀雄は、子規の遺著を耽読するようになるのでした。

そんな折に、吉野秀雄は発病したのでした。

1924年（大正13）3月4日の吉野秀雄の日記を読むと、かっけつ喀血した吉野秀雄が、駿河台の杏雲堂の佐々木院長から、はいせん肺尖カタルであることを告げられ、まっさきにはつ子と妹としこ聰子の学ぶ日本女子商業学校を訪れていることが記されています。翌日すぐに高崎へ帰郷するということを告げるためです。はつ子はその日の晩秀雄の下宿に泊まっています。試験をやめて帰郷せざるをえなくなった旨を、秀雄ははつ子に言って聞かせるのでしたが、3月5日の秀雄の日記の冒頭には、「早朝はつ子と共に泣く。」の記述が見えます。

二人にとっては、それほど衝撃的な病気の宣告でした。

3月5日下宿を引き払った吉野は、田町の駅で、はつ子、兄健太、妹としこ聰子、友人らに見送られて、帰郷の途へと向かいました。

3. 死と背中合わせの青春時代…最初の歌集『てんじょうぎょうし天上凝視』の誕生へ（習作時代）

1924年（大正13、秀雄22歳）3月5日に高崎に帰郷した吉野秀雄は、しばらくは自宅で療養しますが、大学はやむなく中途退学しました。

そして秀雄は、この療養生活中に将来の方針を変更して、経済学から国文学を独力で学ぶことにしました。まず、正岡子規・伊藤左千夫以下「アララギ」派諸歌人の歌集を読み、「ホトトギス」「日光」など、当時を代表する文芸誌に記載されていた歌の中から、彼の気に入った歌を抜粋して、注釈や評を書き入れたりするといったことから勉強を始めました。

6月頃になると体調もだいぶ回復して、精神的にもだいぶ落ち着きを取り戻します。読書も多くこなすことができるようになりました。『子規全集』を予約したり、有島武郎の評論『宣言一つ』に感激したり、また、北原白秋、土岐善麿、古泉千樞、石原純、前田夕暮、木下利玄、折口信夫らの同人誌（短歌誌）である「日光」創刊号（大正13年4月）を購入したりもしています。

また、5月には、父藤一郎と伊香保温泉へ、6～7月には、父藤一郎や兄健太と共に、塩原温泉へ行って療養に努めたりもしています。

比較的裕福な家庭に育った秀雄は、病気に対する不安はあったものの、このように自分の好きな本や文芸誌を取り寄せたり、家族と一緒に温泉療養に行ったりなどと、わりと恵まれた療養生活を過ごすことができたのでした。

こうして、家族の献身的で温かな支えのもとに、秀雄の病状は少しずつ回復するかのよう思われたのですが、病気は、逆に密かに進行していたのでした。

同年8月13日、富岡の祖母の許で療養していた夜のことで。

秀雄は、「左背下に激烈な疼痛」(同年10月10日栗林はつ子宛書簡より)を覚えたのでした。診断の結果は、乾性肋膜炎を発しているということでした。その後3週間もの間、秀雄は39度の高熱に悩まされ続けます。そして、この時の体験から、秀雄は本格的に歌を詠み始めたのでした。

ひょうちん かうべ 氷枕に頭うづめて夕さればわれをめぐりて蚊帳釣らせけり	(『天井凝視』 1)
暮れなづむ窓にひびかふ蟬のこゑ明日もかくして病むにしあらむ	(同 4)
しゅびん ゆし 瘦瓶を油紙につつみて病床のかたはらにならべわれはねむるか	(同 6)
ひと夜さを背の疼きに堪へきたりいまし鶏の声遠く聞く	(同 12)
あらがへど父はいらへずややありて湿布換へむといひにけるかも	(同 14)
はく痰も吐く痰も赤く血みどろなり眼持てれば見ざるべからず	(同 56)
気を緊めてただに堪へよと母上の引き結びくるる向う鉢巻	(同 58)

1924年(大正13)8月に乾性肋膜炎を発し、高熱に苦しむ体験をしたことが、秀雄に短歌を作らせるきっかけとなりました。なかなか熱が下がらないことから、秀雄はその後高崎の実家に戻りますが、しかし、絶対安静の日々は続きます(1924年11月25日~27日の「病床日記」より)。しかも肋膜炎からすでに肺結核に進行していたことが、初版本『天井凝視』の詞書の中に見られます。

上に掲げた七首の短歌は、いずれも吉野秀雄の第一歌集である『定本歌集天井凝視』所収「大正十三年」78首の中より選んだものです。歌番号1、4、6、12、14の五首が「床上雑詠一」、歌番号56、58の歌が「床上雑詠三」の中に収められています。

『天井凝視』という歌集のタイトルから、痛みから身動きさえままならず、来る日も来る日も病床に仰向けになって寝ている吉野秀雄の姿が想像されます。天井の板張りの升目を、じっと見つめて過ごすことしかできなかった秀雄のつらさが伝わって来るようです。

しかし、毎日じっと天井を見つめることしかできなかった秀雄でしたが、そういった状況であっても歌が立派に生まれてくることを、私達はこの吉野秀雄の例から学ぶことができます。あるいは、そういうぎりぎりの状況だからこそ、歌や芸術が生まれて来たのかもしれない。

年譜を読みますと、この頃の吉野秀雄は、正岡子規の『竹乃里歌』を手本にして歌を詠んでいたことが記されています。短歌や俳句といった短詩型の文学は、こういった状況下においても誕生可能な、いわば死の寸前まで創出することのできる芸術でもあるとも言えます。

上の七首の歌からは、吉野秀雄が連日高熱にうなされ、しかも血を大量に吐くことを、情け容赦なく強いられていたことがうかがわれます。そして、激痛で体を動かすことさえままならない苛立ちからか、時には父にまで八つ当たりしてしまう吉野秀雄の姿が描かれています。

父は父で、そういう息子の苦しい胸の内を察してか、息子には何も言おうとしません。そして、しばらく経ってから、何事もなかったかのように、父は「湿布を換えよう。」と、息子に言い聞かせるのでした。そういう父の優しい気遣いに、心でわびる息子の気持ちまでが表現されていて、14の歌はなかなか秀逸ではないでしょうか。

一方母に対しても、病床に横たわる息子の視線は注がれます。息子のあまりに凄惨な病状を目の当たりにして、「気を緊めてただに堪へよ」と言葉をかけてやることしか、母にはなす術がありませんでした。「はく痰も吐く痰も赤く血みどろなり」という息子の姿は、見ていることさえ忍びないものであったことでしょう。せめて息子の頭に向う鉢巻を巻いてやるのが、母にできる精一杯のことでした。そして、そういう母の姿を、吉野秀雄もまた、熱にうながされながらも病床

で敏感に感じ取り、歌にしたためていたのでした。

これらの歌からは、死の不安と恐怖に闘いながら、毎日張り裂けるような思いで現実を生きていた吉野秀雄親子の姿が、彷彿として浮かんできます。本来ならば明るく輝かしい青春を謳歌するはずであった20代前半の時を、吉野秀雄は、死と背中合わせのつらく苦しい青春時代を送っていたのでした。

ところで、吉野秀雄は、生涯に6冊の歌集を残しています。すなわち『天井凝視』、『苔径集』、『早梅集』、『寒蟬集』、『晴陰集』、『含紅集』です。

最初の歌集であるこの『天井凝視』は、当初は1926年（大正15）12月20日に、80冊だけ作られた私家版歌集（非売品）でした。もちろんまだ吉野秀雄が職業歌人として歌を詠む前の、いわば習作時代の歌をまとめたものに過ぎませんでした。

吉野秀雄が、1924年（大正13）23歳の時に発病してから、1926年（大正15）25歳の時に、ある程度健康を取り戻すまでの、「私の三箇年に互った肺病療養生活の日記帳の端に密かに書きとどめ置いた歌を取捨按配して成ったもの」（『『天上凝視』後記』より）で、その時に作った303首を選び歌集にしたものでした。そしてこの『天井凝視』は、療養生活中お世話になった家族や医師、恩師、知人、友人たちへ感謝の代わりとして贈呈されたのでした。

したがって吉野秀雄は、当初この『天井凝視』を第一歌集とは考えていなかったようです。彼自身は、1936年（昭和11）に刊行された『苔径集』の方を最初の歌集と考えていました。『苔径集』に『天井凝視』より126首が再録されたのは、そのためです。

そして、後年この家蔵本（初版本）『病牀歌集・天井凝視』は、秀雄によって大幅に加筆訂正がなされて、『定本歌集天上凝視』となりました。

4. 死の病

『吉野秀雄全集』第8巻（筑摩書房 1977年発行）所収「続・病中雑記」の中に、「『病牀歌集・天井凝視』といふもの」という文章があります。その中で、吉野秀雄は肺結核という彼自身の病気について、次のようにコメントしています。

『天井凝視』の後記をみると、わたしはその三年間足らずの療養で、難病を克服したかのやうにおもひこみ、「わたしは病中屢々青春の逝くを嘆じて徒なる焦燥を覚えたが、かく回復の時に至つて見れば青春は未だに行手に満々として際涯もない。蓋し私の積極的の生活の如きはここに初めて第一階程を踏むに至つたのである。」などとのんきなことをいつてゐるが、これはもちろんたいへんな誤算であつた。やはり後記に「明年の春からは父祖の業に従つて飽迄も精励するつもりである。」といった通り、翌昭和二年になると、家業の見習ひにとりかかりはしたものの、半月とつづかぬうちに痔瘻を發し、四月その手術のあと大喀血して、危篤に瀕した。そしてそれ以後なほ数年間重態の患者として過ごし、昭和六年やつと小康を得て、上州から鎌倉へ引越したが、病気は一生ついてまはつて現在に及んでみるといつていい。結核の療法が安静・空気・栄養・摂生に頼るしか仕方のなかつた時代における病人の悪戦苦闘は、こんにち既に理解しにくくなつてゐるであらう。（『病牀歌集・天井凝視』といふもの）

上の文章で、吉野秀雄が述懐しているように、肺結核は、かつては、多くの若者を死に至らしめる恐ろしい病気でした。しかし、太平洋戦争後は、ストレプトマイシンなどの有力な結核の治療薬が開発されて、肺結核にかかっても治る人が多くなりました。また、集団検診の活発化や、

ツベルクリン反応で陰性になった子どもたちにBCGを接種して、結核に対する抵抗力をつけさせることに成功するなどの予防医学の発達により、肺結核患者はみるみる減少し、人類は結核菌を、まさに絶滅寸前のところまで追い込むことに成功したのです。

しかし、吉野秀雄が発病した大正末期には、結核にかかるということは、イコール死を意識せざるをえないほどの重病でした。

結核は、若い有望な青年子女の将来を奪い、そしてたくさんの悲劇を生みました。吉野秀雄が、あわてて大学を中途退学して故郷に戻り、静養に専念したのも無理なからぬことであったのです。

ところで、文学の中にも、結核による悲劇を扱った作品はたくさんあります。

1936年（昭和11）に発表された徳富蘆花とくとみろかの小説『不和婦ほととぎす』は、最も有名な作品の一つです。川島武男と幸福な結婚生活を送っていた片岡中将の娘浪子なみこが、肺結核ゆえに姑らによって離婚させられて、死んでいく悲劇を描いたものです。堀辰雄の『風立ちぬ』や福永武彦の『草の花』も有名です。

文学者の中にも結核で亡くなった人はたくさんいます。次は、結核で亡くなった文学者を一覧にしたものです。

- ・二葉亭四迷…1864年（元治元）～1909年（明治42）、45歳
- ・正岡子規…1867年（慶応3）～1902年（明治35）、35歳
- ・斎藤緑雨…1867年（慶応3）～1904年（明治37）、38歳
- ・高山樗牛…1871年（明治4）～1902年（明治35）、32歳
- ・国木田独步…1871年（明治4）～1908年（明治41）、36歳
- ・樋口一葉…1872年（明治5）～1896年（明治29）、24歳
- ・長塚節…1879年（明治12）～1915年（大正4）、35歳
- ・石川啄木…1886年（明治19）～1913年（明治45）、27歳
- ・宮沢賢治…1896年（明治29）～1933年（昭和8）、37歳
- ・八木重吉…1898年（明治31）～1927年（昭和2）、29歳
- ・梶井基次郎…1901年（明治34）～1932年（昭和7）、31歳
- ・島木健作…1903年（明治36）～1945年（昭和20）、41歳
- ・立原道造…1914年（大正3）～1939年（昭和14）、24歳

みな文学史に名を残す優秀な文学者ばかりではないでしょうか。若くして病に倒れたことが、改めて悔やまれます。

ところで、吉野秀雄の二番目の妻は登美子ですが、この登美子は、実は上に挙げた詩人八木重吉の妻でした。

17歳で重吉と結婚した登美子には、重吉との間に桃子と陽二の二人の子どもがありました。熱烈なキリスト信徒であった八木重吉が、肺結核で亡くなったのは、1927年（昭和2）29歳のときです。この時登美子は、まだ22歳という若さでした。

ところが、登美子にはさらなる不幸が訪れます。愛する桃子と陽二の二人の子ども達もまた、夫と同じ肺結核で亡くなってしまったのです。桃子は女子聖学院2年生14歳のときに、陽二は聖学院中学校4年生15歳のときでした。愛する夫ばかりか、二人の子ども達にまで先立たれた登美子は、絶望の淵に立っていましたが、キリスト教の信仰によって、かろうじて生きながらえることができていました。

1941年(昭和16)、結核療養所であった神奈川県茅ヶ崎南湖院に、天涯孤独の身を寄せた登美子は、約4年間そこで事務員として働いています。この茅ヶ崎南湖院は、夫八木重吉が最期を迎えた場所であったからです。

そして、1944年(昭和19)11月、登美子は請われて吉野家へ、秀雄の子ども達の教育のためにやって来るのでした。

同じ年の8月29日に、吉野秀雄は最初の妻はつ子に先立たれ、残された四人の子ども達のために、それこそ血痰を吐きながら薯の買い出しをするといった有様でした。心身ともにどん底の生活に、秀雄はあえいでいました。そんな吉野秀雄の窮状を見かねた秀雄の兄が、兄の家に登美子の姪が働いていたことから、当時茅ヶ崎南湖院で働いていた登美子を世話してくれたのがきっかけで、二人は知り合いました。登美子は、八木重吉の遺作と、子ども達が書いた絵や書を入れた大きなバスケット一つを持って、秀雄の家にやって来たと言います。

吉野秀雄と登美子が再婚したのは、1947年(昭和22)10月26日です。この日は、八木重吉が亡くなってから20年目の祥月命日の日でした。

余談ですが、吉野秀雄と登美子は、再婚後夫婦で協力して、八木重吉の遺作の詩を世に出しています。

肺結核で多くの人々が苦しみましたが、吉野秀雄と登美子は、肺結核がもとで結ばれた二人であったと言えるのかもしれませんが。

第二節 はつ子との結婚生活

話は前後しましたが、もう一度最初の妻はつ子の話に戻したいと思います。

1925年(大正14)7月吉野秀雄の23歳の年のことです。秀雄は、神奈川県七里ヶ浜の鈴木療養所に転地療養することになりました。そして、同年12月に、秀雄ははつ子とともに、鎌倉長谷の光則寺近くに借家を借りて、そこに住むことになりました。こうして二人の生活が始まりました。

翌1926年(大正15)4月、秀雄は気管支喘息を併発し、生涯の持病となります。二人の生活が始まったとはいえ、重病人を抱えたはつ子にとっては、決して甘い生活ではなかったはずですが、それどころか、絶えず秀雄には、死の不安がついてまわるわけですから、その苦労は並大抵なものではなかったものと想像されます。

しかし、三年間にわたる療養生活は、はつ子の献身的な看護のお陰で、吉野秀雄の健康を、ようやく小康状態にまで回復させたのでした。

同年11月、吉野秀雄とはつ子は、念願の結婚を果たします。

秀雄は、療養生活中にお世話になった人々へ、感謝の印として、療養生活中にしたためた歌をまとめて、前述した『病牀歌集 天井凝視』を配りました。この初版本『天井凝視』は、1926年(大正15)12月20日に、80冊だけ自費出版されたものです。

なおこの療養中に、吉野秀雄は、その後生涯の師と仰ぐ会津八一に対して、初めて手紙を書いています。秀雄が感銘を受けた八一の歌集『南京新唱』の中で、難解だった歌二首の教を乞うためでした。

それから約20年の月日が経ちました。その間、吉野秀雄は毎度も入退院を繰り返して、生死の境をさまよう経験をしています。その都度はつ子の献身的な支えもあって、何とか生きながらえることができました。

ところが、太平洋戦争の終戦の1年前のことです。秀雄とその家族に、突然思いも寄らない不

幸が訪れました。胃を患っていたはつ子が、1944年（昭和19）8月29日、病弱な夫と幼い四人の子ども達を残して、胃の肉腫のために、亡くなってしまったのです。

はつ子は、まだ42歳という若さでした。

はつ子との結婚生活について、晩年吉野秀雄は、随筆『やはらかな心』の中で次のように述べています。少し長くなりますが引用したいと思います。吉野秀雄が数え年で64歳の時の文章です。

わたしは上州高崎の生まれで、家は織物の問屋。生来の虚弱体質が嵩じ、慶応経済学部の卒業を目前にして胸の病にかかり、それ以後ほぼ十数年療養してひととほりは落ち着けることができたやうなもの、じつはその後も病はずうつとつづき、こんにちに至るまで尾を曳いてみる。あらゆる療法にめぐまれた昨今とは違ひ、安静・栄養・空気・摂生といった、たよりにならない四原則をたよりにしてゐた時代で、一進一退難渋をきはめ、特に昭和二年の春、痔瘻手術後大喀血したときは、まさに一命あぶなかつた。

さういふさなかの昭和元年、二十五（数え年・以下すべて）のをり、最初の家内のはつ子をめとつたといふのは、ずるぶん無茶なことのやうだが、ほんたうはけつしてさうではない。学生時代に約束した女性で、病人でもかまはないからいくといひ、まるで看護婦代わりに来てくれたのだが、これがわたしにとってどんなに幸運だつたか、とてもいひつくせるものではない。わたしはその後も、一年はさんで二度も肺炎にかかり、生死の境をさまよつたこともあるが、結局凌ぎをつけることのできたのは、まったく家内の献身的な看とりと励ましによるものといはねばならない。

かうしていくらか病気に区切りのついた昭和六年の初夏、わたしは家内と二人の幼な児を連れて、上州から鎌倉のいま住んでゐる家に引越した。わたしが三十、はつ子が二十九のときであつた。それから二年たつて、わたしは、父の経営する店の一つの東京店に勤めることになり、子供は男女四人にふえ、そしてわたしはなほしばしば病氣したとはいへ、以前ほどの大病はなく、はつ子にもだいたい平安とおぼしき日が十年ぐらゐはつづいた。わたしの給料は半人前程度だつたが、父にもらつた多少の財産があつて生活には困らなかつたし、病氣の上ではつ子にひどく苦勞をかけたとはいへ、鎌倉でのこの十年間をおもふと、少しばかりは慰めを感じないでもない。

はつ子は人一倍丈夫なたちだつた。わたしのはうが先立つべきことは、自明のものとしてゐた。さういふ彼女が四十をすぎると、胃の潰瘍を病むやうになり、土地や東京の医者をめぐり、磯部鉦泉で長く療養し、やつと回復しておよそ一年を経過した昭和十九年の夏、にはかにわろくなり、鎌倉市内のS外科に入院させたが、検査の結果胃の中にできた肉腫といふ難症と判明し、やがて両肩と右腕への転移も認められ、もはやどうすることもできず、ひつ月もたたぬ八月末、あへなく奪はれてしまつた。

本人にはむろんしまひまで知らせなかつたが、これが別れだといふ予感があつたらしく、家を出る前にとつておきの砂糖であんこを煮、饅頭を作つて子らに食べさせ、日記・手紙類は焼き捨て、覚悟をきめたやうすで入院していつた。警戒警報の鳴りひびく町に病人をかき乗せた人力車がのろのろ動いていき、そのあとに暗澹として従ふ者がつまりわたしであつた。

（『吉野秀雄全集』第5巻所収『やはらかな心』筑摩書房 1977年発行、

「Iふたりの妻と…」「前の妻・今の妻」「前の妻はつ子のこと」より）

1926年（大正15）11月、はつ子と結婚した吉野秀雄は、すぐに高崎の実家に戻りました。しか

し、上の文章にもあるように、何度も命の危ない状況に陥りました。しかし、そんな中であっても、1927年（昭和2）には長女皆子が、1930年（昭和5）には長男陽一が誕生するといった嬉しい出来事もありました。

そして、1931年（昭和6）5月に、再度鎌倉の小町に転居しましたが、これからの10年間は、大きな病気もなく、次男壯児や次女結子が生まれ、吉野家には、初めて平穏な時が訪れたのでした。しかし、皮肉なことに時局は太平洋戦争へと突入し、はつ子が胃の不調を訴える頃には、戦争は敗色濃厚になり、生活物資も医療品もすべてが滞るといった有様でした。

1944年（昭和19）8月、自らの死を覚悟して入院したことが、吉野秀雄の文章には書かれています。「家を出る前にとつておきの砂糖であんこを煮、饅頭を作つて子らに食べさせ」た下りなどは、読んでいて切なくなります。

第三節 はつ子の死…吉野秀雄の日記より

1944年（昭和19）8月29日、はつ子は亡くなりますが、『自註歌集 寒蟬集』（『吉野秀雄全集』第2巻所収、筑摩書房 1969年発行）の中には、8月2日から9月1日までの、その間のはつ子の様子を伝える、当時の吉野秀雄の日記の抜書きが紹介されています。

歌を解釈するための重要な資料になるかと思しますので、これも次に引用したいと思います。

○昭和十九年八月二日。入院準備。はつ子家族の防空頭巾を整理し、また必要物品のありかを書きとめくれたりして尽力す。○三日。はつ子子供達に饅頭をこしらへやる。○四日。栗林の母来る。夜。小生本覚寺夏期大学に出講せしも、警報出でて中止。はつ子、手紙類を焼き捨つ。覚悟あるものの如し。夜、眠りがたく、二時頃月明を浴びつつ庭を歩く。○五日。警報下傳やとひて、はつ子を佐藤外科へ入院せしむ。小生自転車にて病院と自宅の間を往復数回す。○六日。夜、夏期大学の責任果す。○八日。八幡宮実朝祭歌会に出席。夜不眠。○九日。白旗宮にて実朝祭執行。栗林母と前途のこと相談、壯児と結子は郷里へ疎開させる外なきこと等。はつ子腹部も右肩も痛み、連夜眠れず、暗い中で息つまりさうになるといふ。食欲なく、吐気あり。○十日。はつ子の牀側に昼寝す。○十二日。昨夜病院に泊る。はつ子悪寒発熱。今夕、その精神状態をたしかむ。曰く、自分は幸福なり、満足なり、あなたを信ずるゆゑ、子供達のことも一向心配せず、すでに生も死も超ち越えたつもりなりと。○八月十三日。昨夜病院に泊り。はつ子白米のむすび食ふ。午後、本人自ら万一の場合のこといひ出し、さすがに涙をうかぶ。卵暴騰し、十個七円。○十四日。はつ子よく苦痛に耐へて懇ふることなく、苦しいかと訊けばはじめてうなづくのみ。夕方、西の小窓より茜空うつくし。はつ子わづかにこれを望んで、ああいふ空を眺めてみると戦争も何も忘れて平和なありがたい気持ちになるといひ、「菩提樹」「ローレイ」など小声で唄ふ。子ら走り使ひに努む。T君来り、パウロの「すべてわれによからぬものなし。」の語を告ぐ。病院泊り。○十五日。高崎より父来り見舞ふ。はつ子の息づかひいよいよ苦しく、変な咳も加はる。○十六日。子らの休暇中の宿題監督す。病院泊り。○十七日。四児の休暇終り、上の二児は勤勞奉仕、下の二児は学校、その御成校にて合唱する式歌病室に聞こえる。屢々氷を砕き、指に血にじむ。内科の江上先生来診。夜その私宅を訪ふに、癌にあらで肉腫ならんといひ、絶望を宣せらる。○十八日。子らに母重態のことを改めていひきかす。皆涙なり。毎日由比ヶ浜通りへ氷買ひにゆく。統制きびしく一塊の氷さへ容易には得難し。○十九日。この日開腹手術の筈なりしも、熱八度八分出でて日延べす。夕、東大外科よ

り福田博士来診。やはり肉腫にて、すでに両肩右腕にも転移あり、手術しても全く無効のよしはる。サイパン島同胞最期の模様、米紙の報道によりて新聞に出づ。○二十日。はつ子食欲絶え、やうやく果汁位。その舌茶色を呈せり。熱高く、脈悪く、時に苦痛に堪へきれで死を冀ふ。小生声を荒らげてはげます。パリ戦場化さんとし、独軍いよいよ危機に立つ。○二十一日。米機八十、三たびに互つて九州中国を襲ふ。○二十二日。身も世もなく苦しきなり。○二十三日。全身疼痛、からだ置きどころなく、時に床の上に立つ。足脚冷え来り、自ら死期近づいたりといふ。○二十四日。熱八度八分、脈百三十、呼吸四十。とぎれとぎれに曰く、ことに意気地なくて申訳ないが、……こんなに苦しうては、……殊によつたら死なしてもらふかもしれぬ。……云々。何気なく手相を見るに、生命線をぶち切る線生じをりておどろく。夜しきりに稲妻す。○二十五日。昨夜病院泊り。けふ割合平静。母手作りのうどんうまがりて食ふ。しかしゆるゆる仲直りならん。午後ちよつと眠つたあと、自分の葬式の夢見たとて、おちついてこまごま話す。○二十六日。結子、はつ子の足首を握りて昼寝す。あはれなり。○二十七日。病源確定のため腋下淋巴腺の切片を取る小手術す。海苔ずし二つ三つやつと食べ、アイスクリームのみうましといふ。○二十八日。植木屋三人来り、庭に防空壕掘る。はつ子殆ど口きかず。食べものこといふをいやがり、今ほしいのは鮎の姿ずしだけといふ。○二十九日。苦勞して鮪のすし作らせしも、食はず。指をしみじみ眺めて、ああ指の先のむくみが来たといひ、おもむろに永別を告げあふ。本人あまりに自若としてむしろ物足りぬ思ひせし位なり。会津先生に戒名 附与依頼の手紙かく。夜、危篤に陥り、十一時二十分瞑目す。母と二人通夜。○三十日。遺骸を自宅に移す。午後、柩の前にて小生歎異鈔を誦み、それより名越の火葬場に送る。○三十一日。骨拾ひ。○九月一日。葬式。

日記とはいうものの、一編のドキュメンタリーを見ているようで、迫力がああります。

死を目の前にして、「自分は幸福なり、満足なり、あなたを信ずるゆゑ、子供達のことも一向心配せず、すでに生も死も超ち越えたつもりなり」と言うはつ子の言葉には、頭が下がります。女性は、どうしてこんなにも強いのでしょうか。

しかし、十四日以降の記述には、あまりの激痛からか、さすがに辛抱強いはつ子でしたが、つらそうな描写が続きます。十四日。「はつ子よく苦痛に耐へて憊ふることなく、苦しいかと訊けばはじめてうなづくのみ。」十五日。「はつ子の息づかひいよいよ苦しく、変な咳も加はる。」はつ子の病状は、いよいよ悪化してきました。

そして十七日、吉野秀雄は決定的な言葉を耳にします。夜、内科の江上先生の自宅を訪れた吉野秀雄は、妻の病気の現状を確認しますが、癌ではなかったものの、先生から、「絶望を宣告」されてしまうのでした。

十八日。先生から宣告された吉野秀雄は、翌日子ども達を集めます。そして、子ども達を前にして「母重態のこと」を言って聞かせるのでした。それは言って聞かせる父にとっても、それを聞いている子ども達にとっても、さぞかしつらい一瞬であったことでしょう。「皆涙なり。」家族にとっては、あまりにもつら過ぎる現実でした。この時、戦争はさらに深刻の度を深めていました。病人のため使う氷さえも事欠く有様だったのです。

二十日。はつ子は食欲がまったくありません。はつ子の舌の色は、茶色に変色していました。高熱にうなされて、脈も早くなり、さすがのはつ子も苦痛に堪え切れずに、弱音を吐きます。夫に対して、「死を冀う」のでした。秀雄は、声を荒らげて励ましますが、しかし、はつ子にどうしてやることもできませんでした。

二十九日。はつ子は、ずっと痛みに苦しみ続けます。はつ子を励ますために、吉野秀雄は、意を決して物資の乏しい中を、苦勞して鮪まぐろずしを作らせて、はつ子に食べさせようと試みました。しかし、残念ながらはつ子は食べてはくれませんでした。それどころか、自分の指をしみじみと眺めて、いよいよ最期の時が来たことを悟るのでした。そして、はつ子は落ち着いた様子で、秀雄に対して、「永別を告げ」たというのです。こうして、夜11時20分に、はつ子は息を引き取りました。

第三章 20首の歌の作品鑑賞

ここでは、「第一章 高校生に伝えたい珠玉の20首」の項で掲げた、20首の歌の具体的な解説をしていきたいと思います。

その参考資料としては、吉野秀雄が自分自身で歌の解説をしている、『吉野秀雄全集』第2巻所収『自註歌集 寒蟬集』(筑摩書房 1969年発行)と、『吉野秀雄全集』第5巻所収『やはらかな心』(筑摩書房 1977年発行)とをまず参考にしました。また注釈書としては、片山貞美著『吉野秀雄の秀歌鑑賞』(短歌新聞社 1977年発行)と、木村聰著『吉野秀雄歌解』(彌生書房 1978年発行)の二冊を参考にしました。

歌集『寒蟬集』には、「昭和十九年」と「昭和二十年」の、二年間にわたる計441首の歌が収められています。その内訳は、「昭和十九年」が127首、「昭和二十年」が314首です。

「玉簾花」は、「昭和十九年」の項の最初に掲載されている101首の連作です。

「玉簾花」の詞書には、「昭和十九年夏、妻はつ子胃を病みて鎌倉佐藤外科に入院し、遂に再び起たず。八月二十九日、四児を残して命絶えき。享年四十二。会津八一人戒名を授けたまひて淑真院釈尼貞初といふ」と書かれてあります。

吉野秀雄は、はつ子の入院から死へ、そしてその死から百日忌にかけて、百数十首の歌を詠んでいます。前述した『やはらかな心』には、「歌を詠むことによつて辛うじて自分みづからが救はれてゐた」とあります。愛する妻の死という現実に直面して、吉野秀雄は歌を詠むことによってしか、自分自身を保つことができなかったのです。

1. 古ふる畳だたみを蚤のみのはねとぶ病室なに汝をがたまをの緒ほそは細りゆくなり (「玉簾花」1100)

【歌意】

赤茶けて粗末な古畳の上を、蚤が跳ね飛ぶような不衛生な病室の中で、お前の命は次第に細くなっていくのである。

【説明】

「玉簾花」101首の巻頭歌であると同時に、歌集『寒蟬集』441首の第一番目の歌でもあります。吉野秀雄の悲しみは、ここから始まります。

「たまの緒」は、命の意味です。

『玉』は『魂』で、人間の体内に物的に在るものと想像して、それを体外に抜け出ないようにつないでおくのが『緒』(ひも)だというのである。緒が細って切れれば魂は体外に遊離してしまう。すわち死ぬことになる。(片山貞美著『吉野秀雄の秀歌鑑賞』)

「佐藤外科はやや広い普通の住宅を病院に使ってゐて、家内の病室は二階西はづれの六号」(『自註歌集 寒蟬集』)にありました。佐藤外科が、不衛生な病院であつたというよりも、終戦間際の、

国民すべてが窮乏生活にあえいでいる中で、病院であっても例外ではなかったということのようです。満足な医療は、所詮望む術もありませんでした。

「戦時下畳替へなどできぬ赤茶けた畳を、蚤があらはにとびはねるといふのは、当時一般の平凡事ではあったが、それにしてもかういふところで家内の生命が絶えだえになつていくのは、身にしみるさびしさであつた。」(『やはらかな心』)

2. 病む妻の足頸にぎり昼寝する末の子をみれば死なしめがたし (「玉簾花」1105)

〔歌意〕

病床に臥している妻の足くびを握り、昼寝をしている末の子のいたいけな姿を見ていると、この子のためにも妻を死なせてはならないと思う。

〔説明〕

この歌は、吉野秀雄の『寒蟬集』の代表歌です。

「末の子」は、当時数え年9歳(満8歳)の次女結子のことです。国民学校(今の鎌倉市立御成小学校)2年生でした。「結子は九つだつたが、末つ子のため母に甘え、学校からの帰り途を病院へ廻つて昼寝したりした。母親もそれを心待ちにしてゐるらしかつた。日記の八月二十二日の条に『結子下校の途、立寄りて昼寝す。』とあり、二十六日の条には『結子、はつ子の足首を握りて昼寝す。あはれなり。』とある。さすがに重病の母に遠慮して床へはあがれず、単に足頸を握つて畳の上にごろ寝するのであり、それを凝視してゐると、断つに断たれぬ恩愛のきづなが感じられて、いかにも不憫であつた。」(『自註歌集 寒蟬集』)

吉野秀雄の二番目の妻である吉野登美子の著『わが胸の底ひに 吉野秀雄の妻として』(弥生書房 1979年発行)には、この当時の兄弟姉妹の年齢が書かれています。それによると、「数え年十八歳の長女皆子、十五歳の長男陽一、十二歳の次男壮児、末娘の九歳の結子」とあります。

今で言えば、小学校2年生の子どもを残して逝かなければならなかったわけですから、母はつ子の思いは、察するに余りあります。おそらくは死ぬに死ねない心境だったのではないのでしょうか。

そして、「末の子」結子も、8月18日には「母重態のこと」を、父から知らされていたわけですから、死ぬ3日前の母の現実を、幼いながらもうすうすと感じ取っていたようです。本当は、母に甘えたくてしかたがないのに、遠慮しながらそっと足くびを握ることで、母とのスキンシップを求めている結子の様子があわれで胸を打ちます。

そして、歌人吉野秀雄の目は、その握られた母の足くびと握っている幼い我が子の手に注視されていきます。横たわる母と子、そしてその二人を眺める父、この短い歌の中には、三人のそれぞれの思いや、それまでの関係までもが濃密に凝縮されているようで、見事ではないでしょうか。

3. 生かしむと朝を勢へど蝸の啼くゆふべにはうなだれてをり (「玉簾花」1109)

〔歌意〕

なんとかして妻を生かしてやりたいと、朝は意気込んだりするのだけれども、蝸の鳴き出す夕暮れ時には、やはり重態である妻の現実を目の当たりにして、落胆してうなだれている。

〔説明〕

初出は、短歌誌「春秋」です。元は、「朝にはきほひ立てれど蝸の啼くゆふぐれはうなだれにけり」であったものを、小林秀雄の雑誌「創元」発表時に書き改められています。

「きほふ」(競ふ)は、「負けまいとして張りあう動作で勢いづいた感じ」(旺文社古語辞典)が

語感で、「①互いに張りあって勇み立つ。意気込む。②せりあう。負けまいと対抗する。先をあらそう。」等の意味があります。②の用例には、必ず格助詞「に」を受けるとあります。「勢ふ」と「勢」の字を吉野秀雄が当てていることから、ここでは、①「勇み立つ。意気込む。」の意にとりました。

「前夜いくらかでも眠れた朝は、病人も案外元気だし、事実熱も脈も平静であり、どうにかなるかもしれぬと一縷の望みをいだかせるが、午後になると、やはりいつものやうに悪化し、蝸の声が扇ヶ谷の丘からひびいて来る暮れ方には、けふも落胆し、うなだれてしまうといふので、自分としては技巧を弄さず、自然にありのままにいつたつもりである。」(『自註歌集 寒蟬集』)

医学的には、生きる望みを絶たれたはつ子ですが、夫や家族からすれば奇跡を信じ、「一縷の望み」にすがりつきたくなるのは当然のことであると思われます。妻の病状の一進一退に、夫である吉野秀雄が一喜一憂する気持ちも、よくわかります。現実の厳しさを目の当たりにして、落胆して、うなだれる夫の姿が彷彿と浮かんできて不憫です。

4. 額冷やすタオルの端に汝がなみだふきやりてはたわが涙拭く (『玉簾花』1110)

〔歌意〕

お前の額を冷やしていたタオルの端でお前の涙を拭いてやり、そして、その同じタオルで私もまた自分の涙を拭いたことだ。

〔説明〕

『自註歌集 寒蟬集』に、この歌が作られた背景についての説明があります。

「ある日病人は、彼の世といふものを信ずることはできないが、しかしこの世において満足し、何一つ不平不満のない心になれたといひ出して、さすがにさめざめと泣いたことがある。その折詠んだ歌だ。歌の表面にさういふ複雑な感情は出てゐないが、しかしこれが単なる感傷に墮してゐないとすれば、自分はそれだけで足りるのだ。」

吉野秀雄は、自身が何度も死に瀕した経験から、『歎異抄(歎異鈔)』を耽読して、親鸞の浄土真宗に傾倒していきましたが、妻はつ子は、死の直前まで宗教にすがろうとはしませんでした。そして、己の生命が終わろうとする時に、はつ子は病床に臥しながら、そばで看病する吉野秀雄に向かって、しみじみと、あの世というものを信ずることはできないが、しかし、この世においては、十分に満足で幸せであり、不平不満は何一つもないと言って泣いたというのです。その言葉を聞いて、吉野秀雄もまた涙せずにはいられませんでした。はつ子の涙を、はつ子の額を冷やしていたタオルの端で拭いてやり、そして、その同じタオルで自分もまた涙を拭いたのでした。

前述した吉野秀雄の日記の8月12日の項に、「○十二日。昨夜病院に泊る。はつ子悪寒発熱。今夕、その精神状態をたしかむ。曰く、自分は幸福なり、満足なり、あなたを信ずるゆゑ、子供達のことも一向心配せず、すでに生も死も超ち越えたつもりなりと。」という表現がありますが、このあたりの内容が、歌の背景になっているのかもしれませんが。

夫にとって、これほどありがたい妻の言葉があるのでしょうか。早い時期から許婚となった二人ではありましたが、新婚前後の20代前半から30代前半にかけて、吉野秀雄は何度も血を吐いて死の危機に陥りましたので、そのたびごとに、はつ子に大変な心配をかけてきたはずで、長女皆子と長男陽一との間には、生まれてすぐに亡くなった、名前さえつけられない子どももありました。秀雄の健康がようやく落ちつきを見せたときには、こんどは戦争が始まりました。吉野秀雄との結婚生活は、はつ子にとって、決して楽なものではなかったはずで、しかも、愛する四人の子ども達を残して逝こうとしているわけですから、心残りが無いはずがありません。

それでも、はつ子は満足で、何一つの不平不満もないと言ってくれたのでした。それは、おそらくは、残される夫に対しての、はつ子の最後の励ましであり思いやりであったのではないのでしょうか。

そういう万感の思いを、はつ子の流す涙は物語っています。そして、そのはつ子の思いも夫の心へと切々と伝わり、夫もまた涙を禁じ得なかったのだと思います。「はた」という語は、「～もまた」の意の副詞です。はつ子の涙は、夫の涙でもありました。タオルは、二人の愛をつなぐ絆でもあったのです。

5. ^{すわ}坐りてはをりかぬればぞ^{たちあが}立上り^{なれ}苦しむ汝をわれは見おろす (「玉簾花」1112)

【歌意】

お前の苦しむ様子を見ていて、私はじっと座っていることができなかつたので、思わず立ち上がってみたのだが、しかし、やはりまた苦しむお前の姿を、じっと見おろすことしか私にはできなかったのだ。

【説明】

妻の苦しむ様は、時には側で見えていられないほど気の毒であったようです。あまりにも痛々しい妻の姿に、静観することができなくなった夫は、立ち上がって妻をじっと見おろすことがしばしばであったといえます。

上の歌は、「すでに^{しよくよくかいむ}食欲皆無で熱高く、脈も呼吸もみだれ、^{すんじ}寸時も休みのない全身の疼痛にさいなまれる妻を、わたしはどうしてみようもなく、立ちあがつてじっと見つめてみるといふ歌」(『やはらかな心』)であるということでした。

吉野秀雄は、妻の苦しむ姿を見て、居ても立ってもいられなかつたのでしょう。

「^{すわ}坐つてみられないので、^{たちあ}立上がつて病人の苦痛を凝然と見下してゐる。見下したとて、それが^{いちごう}苦痛を一毫をも減ずることのできぬはいふまでもない。だが、それでも何でも見下してゐなくてはならぬ。それがぎりぎりの自分の愛情の表出である。」(『自註歌集 寒蟬集』)

「をりかぬればぞ」は、「いられなかつたので」の意かと思います。『自註歌集 寒蟬集』では、この表現について、「よしあしはともあれ、自分の体臭の如きものと思つて欲しい。」というコメントが付けられています。適切な表現ではないかもしれないが、これが吉野秀雄の歌であるという意味でしょうか。

妻の苦しみは、とてもかわいそうで見えていられませんでした。しかし、だからと言って、苦しんでいる妻の現実から目をそらすわけにもいきませんでした。夫として、妻の苦しみから逃げるわけにもいかなかつたのでしょう。しかし、見つめているからと言って、妻の苦しみが和らぐわけでもありませんでした。こうしてどうすることもできずに、思わず立ち上がる吉野秀雄でしたが、しかし目だけは妻から離れませんでした。じっと見つめることしかできなかったのです。

ここには、妻と一緒にしがき苦しんでいる夫の姿があります。そして、夫の心の内の、どうすることもできない、ぎりぎりの悲痛な叫びがあるのではないのでしょうか。

6. ^{をきなご}幼子は死にゆく母とつゆ知らで^つ釣りし^{うを}魚の^{びく}魚籃を^{のぞ}覗かす (「玉簾花」1113)

【歌意】

幼い子どもは、やがて母が亡くなるものとは少しも知らないで、釣ってきた魚の入っている^び魚籃の中を、誇らしげに母に見せている。

【説明】

「母は病気でも、戦争は劇しくなつても、暑中休暇中の子供には子供の世界がある。手助けの合間をみては、泳ぎにもゆくし、釣りにもいく。この一首は、日記の八月九日の条に、『壯児と結子、滑川で釣をした帰り、鱈や鯊の獲物をはつ子に見せようとして病院へ立寄る』とあるのを、あるがままに作ったものだ。そんな時、病妻はこの世に残していかなばならぬ子らにひときは愛着を感じたことであつたらう。」（『自註歌集 寒蟬集』）

「魚籠」は、魚籠とも書き、釣った魚を入れるための器のことです。母を喜ばせようとして、勢い込んで病室に入って来た「幼子」の、目を輝かせて釣ってきた魚を母に見せようとする姿と、そういう我が子のために、笑顔で一緒に魚をのぞき込もうとしている「死にゆく母」の姿とが、対照的に描かれています。「つゆ知らで」は、「少しも（まったく）知らないで」の意です。

片山貞美は、『吉野秀雄の秀歌鑑賞』の中で、『自註歌集 寒蟬集』を引用しながら、「あるがままに歌にするということは、このような場合なかなかできるものではなかろう。作者は万斛の思いを押さえて事態を直視している。『写実』とはそういう自己克服の情熱によって行われなければ叶わぬのだ。」と述べています。「万斛の思い」とは、はかりきれないほどたくさん思いという意味です。もうすぐ不幸が訪れることをまったく知らずに、つかの間の幸福を味わっている我が子の姿を、感情に流されることなく、これまた一步離れて、客観的に直視している歌人の目があって初めて歌が完成することを、片山貞美は教えてくれています。

7. をさな子の服のほころびを汝は縫へり幾日か後に死ぬとふものを (「玉簾花」1121)

【歌意】

幼い子どもの服のほころびをお前は縫っていることだなあ。何日か後には死んでしまうというのになあ。

【説明】

「女性の心がけは微妙にやさしいもので、病妻も入院に際してハンドバッグの中へ針や縫糸や鋏を入れてみたらしく、ある時病室へ入ってきた結子の簡単服の裾のほころびを見つけて、『うちでは直してくれる人がないのかい?』といひながら、仰けに寝たまま縫つてやつたことがある。白塗りの珠を綴り合わせた夏のハンドバッグを……それはあとで柩の中へ入れたが……枕元をまさぐつて、むくみの来てゐる青い手先で裁縫道具を取り出して、不自由な恰好で縫い出した映像はいまもくつきり目の前に浮かんでゐる。自分でいふのはをかしいが、母性の深さに感動して作つた一首だ。」（『自註歌集 寒蟬集』）

「幾日か後に死ぬとふものを」という下の句の表現から、吉野秀雄は既に、妻の死を覚悟していたことがわかります。そして、はつ子もまたそうであったのかもしれませんが。残りわずかな時間を、母として少しでも我が子に何かしてやりたいと、はつ子は思っていたはずです。

そして、父もまたそういう母の思い出が、少しでも我が子の心の中に残ることを願っていたのではないのでしょうか。子を思う母の思い、その人間として一番美しい情愛が、近い将来に断ち切られてしまうことの残酷さをこの歌は秘めています。病室には母と子の二人だけの静かな時が流れていたのです。

8. 生きのこるわれをいとしみわが髪を撫でて最期の息に堪へにき (「彼岸」1216)

【歌意】

生き残る私のことを逆に心配していとしみ、私の髪を撫でて励ましてくれた妻は、己の最期の

時を、息も絶え絶えにながら懸命に耐えていたことだ。

【説明】

『寒蟬集』は、最初に「玉簾花」が101首、次に「百日忌」が13首、そして三番目に「彼岸」が13首と続きます。上の「生きのこる」の歌は、「彼岸」三首目の歌です。はつ子が亡くなったのは、1944年（昭和19）の8月29日ですが、「彼岸」一編は、その年の暮れのはつ子の百日忌が過ぎたあたりから、翌1945年（昭和20）の1月にかけて制作されたものです。はつ子の追憶として詠まれた一連の歌をまとめたものでした。

『やはらかな心』には、「生きのこるわれをいとしみ」はつ子が次のようなことを吉野秀雄に告げたことが紹介されています。

まず、はつ子は、「自分には死後の世界は信じられない。人間はこの世だけで終わるに違いない。そしてこの世に関するかぎり、自分は幸福であつたとあなたに感謝する」と言い、そして、「黙つてゐてもあなたは子らの面倒をみてくれるに違ひないから、いまさら改めて四人の子らをよろしくたのむなどとはをかしくていへない」と言ったそうです。さらにはつ子は、「これから戦争のはげしくなる一方の、この世に生きていかねばならぬあなたや子らは、死んでいく自分よりもはるかにつらいだらう、どうかしつかりやつてください。」と言ったといひます。

「はつ子は死にぎはに、『あの世はないものだ』と冷静にいひきつたが、その点についてわたしはどう反応したかといふと、あの世がないならば、わたしがあの世をこしらへよう、そこで再び彼女に会ふあてがないとしたら、とてもこの世を生きていけるはずがない。……と、わたしはさうおもつた。」（『やはらかな心』）

これらのことは、「第三節 はつ子の死」で紹介した8月12日の日記の話、つまり、「○十二日。昨夜病院に泊る。はつ子悪寒発熱。今夕、その精神状態をたしかむ。曰く、自分は幸福なり、満足なり、あなたを信ずるゆゑ、子供達のこと一向心配せず、すでに生も死も超ち越えたつもりなりと。」辺りのことが下敷きになっているのかもしれない。

「死んでいく自分より」も、「戦争のはげしくなる一方の、この世に生きていかねばならぬ」残された家族の方を逆に気遣い、夫の「髪を撫でて」「生きのこるわれをいとし」むはつ子。それに対して、「あの世がないならば、わたしがあの世をこしらへよう」、「そこで再び彼女に会ふあてがないとしたら、とてもこの世を生きていけるはずがない。」と言ひ切る吉野秀雄。

ここには、夫婦愛の究極の姿が描かれているのではないのでしょうか。

9. 信ずれば子らを頼むといまさらにあにいはいはめやといひて死にけり

（「彼岸」1217）

【歌意】

「あなたのことを信じているからこそ、私が死んだ後、子ども達のことをよろしくお願ひしますなどと、今さらどうして言えるでしょうか。（いえ、言えるはずがありません。）」と言って、妻は死んで行ってしまったことだ。

【説明】

これも、前の歌「生きのこるわれをいとしみ」の「説明」の項で紹介した話からできた歌です。つまり、「黙つてゐてもあなたは子らの面倒をみてくれるに違ひないから、いまさら改めて四人の子らをよろしくたのむなどとはをかしくていへない」と、はつ子の言った言葉が基になっているものと思われまふ。

仮にこの歌だけで鑑賞するとなると、何か冷たい妻のようにも聞こえてしまうかもしれません。前述したこの歌の前の歌「生きのこるわれをいとしみ」（「彼岸」1216）の歌や、さらにもう一つ

前の歌「かの^{きは}際におのが^{ひとよ}生涯をつきつめて^{さいは}幸ひとなして^な汝はほほゑみし」(「彼岸」1215)と共に鑑賞しなければ、評価を誤ることにもなりかねません。

妻は、死に際に、夫と暮らした自分の一生はとても幸せであったと言って微笑み、さらには、夫を信ずるがゆえに、あえて「子らを頼む」とは言わなかったというのです。

この歌は、先に死んで行った妻が、生き残る夫に対して送った、最大にして最後のエールだったのではないのでしょうか。

「あにいはめや」は、「豈^あに言はめや」で反語です。「どうして言いましょうか。いえ言えません。」の意です。

10. 真命^{まいのち}の極^{きは}みに堪^たへてししむら^{あへ}を敢^{あへ}てゆだねしわぎも子あはれ (「彼岸」1218)

〔歌意〕

真実の命が、いままさに燃え尽きようとするその極限に堪えて、己^{おのれ}の身^しを強^しいて私に任せたわが妻よ、ああ。

〔説明〕

以下の「彼岸」1218～1220の三首は、吉野秀雄の代表的な愛の絶唱歌です。山本健吉は、その著『日本の恋の歌』(講談社現代新書 1975年発行)の中で、「えりを正す愛の^{そうごん}莊嚴」の歌であるとして絶賛しています。

真命^{まいのち}の極^{きは}みに堪^たへてししむら^{あへ}を敢^{あへ}てゆだねしわぎも子あはれ (「彼岸」1218)
これやこの一期^{いちご}のいのち^{ほむらだ}炎立ちせよと^{せま}迫りし^{わぎも}吾妹よ^{わぎも}吾妹
ひしがれてあいろも^だわかず^{ぢごく}墮地獄のやぶれかぶれに^{ふる}五体震はす (同 1219)
(同 1220)

これらの歌が作られた時期については、『やはらかな心』によると、その年の暮れであると書かれています。「回想の歌であるために、『妻』とか『汝』とかいはずに、『わぎもこ』とか『吾妹』とかいふ間接的な呼び方になつたしだいだ。」(『やはらかな心』)

はつ子が亡くなろうとする直前の出来事でした。その時吉野秀雄を驚かす信じられない出来事がおこりました。はつ子が、吉野秀雄に体を求めてきたというのです。

それは、はつ子が亡くなる前日の8月28日の夜のことでした。

「真命」は、秀雄の造語です。「真命」の「真」は、「本当の、真実の、純粹の」の意を表す接頭語です。「死ぬ前日の夜の出来事」であったので、「真命^{まいのち}の極^{きは}みに堪^たへて」は、「真実の生命が、いままさに尽きようとするその極限に堪えて」の意かと思えます。

「ししむら」とは、肉体のことです。「ゆだねし」は、他動詞ナ行下二段活用「ゆだね(委ぬ)」の連用形に、過去の助動詞「き」の連体形が接続したもので、「(身を)任せた」の意です。

「わぎも子」は、「吾妹子・我妹子」のことです。「子」は接尾語ですので、「わぎも(吾妹・我妹)」と同じ意味です。男性側から妻や恋人や姉・妹に対して親しみを込めて呼ぶ語で、ここでは、もちろん妻はつ子のことを指しています。「あはれ」は、感嘆・悲哀・哀憐など、さまざまな感動を表す感動詞です。

11. これやこの一期^{いちご}のいのち^{ほむらだ}炎立ちせよと^{せま}迫りし^{わぎも}吾妹よ^{わぎも}吾妹 (「彼岸」1219)

〔歌意〕

これこそが一生一大の命をかけた最後の愛である。炎と燃え上がり、大燃焼せよと迫って来た妻よ、我が妻よ。

〔説明〕

「これやこの」は、「これがあの例の、これがあのうわさの」の意の古語ですが、片山貞美著『吉野秀雄の秀歌鑑賞』では「強めの指示」の意であるとしています。「一期」は、「一生、一生涯」の意ですので、片山貞美は「これやこの一期のいのち」を、「これぞ疑いもなく一代最期のいのち」と解釈しています。

「炎立ちせよ」については、木村聰著『吉野秀雄歌解』では、「火炎となって燃焼させよ」の意であるとしています。

ところで、「炎立ちせよ」は字余りで破格ですが、片山貞美は、「せよ」という俗語を用いることで、「真実を露呈する意図が働いた」のではないかと、同じ本の中で説明しています。妻の必死な愛の思いを、包み隠さず歌に表現したことを、「真実を露呈する意図」と述べたものと考えられます。「迫りし」の「し」は、過去の助動詞「き」の連体形です。

『自註歌集 寒蟬集』には、「彼岸」1218番「真命の」の歌と、同1219番「これやこの」の歌の二首の歌に関して、吉野秀雄自身が次のように解説しています。

かういふ歌にまで自註を求める程世人が刻薄であらうとは思へぬが、これは八月二十八日(死ぬ前日の夜)の出来事であつた。看護婦が席をはづしてすぐ、「こんな死ぬばかりのからだになつても…。」といひ出した亡妻の真剣必死の声をどうして忘れることができようか。彼女の人間愛の最後の大燃焼であり、炎々たる火焰の中の骸となつていつたと観るべきである。事ここに及べば、肉体も精神も糞もない。そんな分別は人間を全体として捉へることのできぬ青瓢箪流のたはごとに外ならぬのだ。……ただこれだけをいふ。南無阿弥陀仏。

これに関しては当然日記に一行の記載があらう筈はないが、わたしはその後久しい間、人間の奥邃さ、愛情の不可思議さにぶちのめされたなりでゐた。想ふと、いつも体が慄へた。何か恐ろしくなまなましくて、歌になど詠めたものではなかつた。しかし、五ヶ月ばかり経つてやつと自覚をとり戻し、ある日、この二首をただひと息に押し出して合掌敬礼した。作の是非はしらぬが、わたしは歌よみとしての……小説かきその他でなく……誇りを感じざるを得なかつた。
(『吉野秀雄全集』第2巻所収『自註歌集 寒蟬集』、筑摩書房 1969年発行)

12. ひしがれてあいろもわかず墮地獄のやぶれかぶれに五体震はす (「彼岸」1220)

〔歌意〕

うちのめされて物の分別も見失い、もう地獄に落ちようがどうなっても構わないと、死に物狂いで妻を抱いたことだ。

〔説明〕

「ひしがれて」は、「押しつぶされて、勢いをくじかれて」の意です。『自註歌集 寒蟬集』に、「人間の奥邃さ、愛情の不可思議さにぶちのめされたなりでゐた。」という表現がありますので、「うちのめされて」の意ではないかと思ひます。

「あいろ」は「文色」の略で、「①模様。形。物のようす。②ものの区別。識別。」(旺文社、古語辞典)「わかず」は、自動詞カ行四段活用「わく(分く・別く)」(①区別される。識別される。②理解される。判断される。)の未然形に、打消の助動詞「ず」が接続したものです。従って、「あ

「いろいろわかず」は、「物の分別もつかない」状態に陥ってしまったことを言っているのだと思います。

「墮地獄」は、地獄に落ちることです。木村聰著『吉野秀雄歌解』には、「一首では夫人との訣別の愛に身も心も焼きつくした……それは厳粛であり、愛の極限ではあるが、半面、かかる夫婦間の行為もこれが最後であるという悲痛感とともに、秀雄の言を借りれば、『人間の奥邃さ、愛情の不可思議さにぶちのめされた』という動転した心理状態を説明する表現である。」とあります。

「五体震はす」については、片山貞美著『吉野秀雄の秀歌鑑賞』では、「恐怖というよりも切ない真実の思いがとげられる刹那の戦慄であろう。そして歌われた対象はその切なさだ。」としています。

吉野秀雄は、『やはらかな心』の中で、「彼岸」1218～1220の三首の歌について、次のようにも言っています。

「かういふ歌を読んで妙な印象をうける人もあらうとは察しられるが、わたしのやうに肉体と精神とを分離して考えることなどたいてい不可能な人間にとつては、誇りもなければ卑下もなく、これでいたし方なく、これでぎりぎりなんだとつぶやくよりほかに手段はない。つまりこれに関するかぎり、わたしは『南無阿弥陀仏！』と唱える以外、何もいひたくない」

『南無阿弥陀仏！』と唱える以外、何もいひたくない」と、吉野秀雄は、ここで少し怒ったように述べていますが、妻との最後の愛の交歓を詠んだこれらの歌は、戦後間もない1946年（昭和21）に発表され、歌壇はもとより、世間でも一大センセーショナルを巻き起こしました。

そして、秀雄の名は一躍注目を集める存在になったのです。しかし、一方では、戦時中の禁欲的な余韻がまだ色濃く残り、世間一般的な道德規範も、まだ儒教的な倫理観が根強く残っていた時代でもあったでしょうから、そのような時に、妻とのSEXを歌に詠み、公にすることに対する反発も当然のことながらあったであろうことは、想像に難くありません。

吉野秀雄からすれば、歌人としての「ぎりぎり」で純粋な気持ちから作った、大切な歌であったはずなのに、なかなかそういう本当の自分の気持ちは正しく理解されず、逆に興味本位で見ようとしないう世間の目に、半ばうんざりしてしまったのかもしれない。

そして、今日に至っても、彼の芸術が正しく評価されていないのではないかと、実は私は思っています。正しく評価されていないというのが言い過ぎであれば、妻とのSEXを扱ったが故に、なかなか日本人の精神風土からは受け入れてもらえず、評価の対象から疎外されてしまった、ないしは低く評価されてしまったのではないかと、思っています。

「玉簾花」1110番の歌「額冷やすタオルの端に汝がなみだふきやりてはたわが涙拭く」の項でも書いたことですが、吉野秀雄は、自身が何度も生死の境をさまよった経験から、『歎異抄（歎異抄）』を耽読し、親鸞の浄土真宗に傾倒していきます。しかし、妻はつ子は、死の直前まで宗教にすがるといえることはありませんでした。それは、二番目の妻登美子が先夫八木重吉に先立たれ、さらには愛する二人の子ども達までもが、次々と夫と同じ病気で亡くし、八木重吉の影響から入信したキリスト教にすがることによって、かろうじて生きながらえて来た生き方とは対照的な生き方です。

そして、己の生命が今まさに終わろうとする時に、はつ子は病床に臥しながら、そばで看病する吉野秀雄に向かって、しみじみと、あの世というものは信ずることはできないが、しかし、この世においては、十分に満足で幸せであり、不平不満は何一つもないと言って泣いたというのです。そしてその言葉を聞いて、吉野秀雄もまた涙せずにはいらませんでした。

人が死を直前にして何を思うのか。それはおそらく、その人が人生をどのように生きてきたかということと深く関わっているのだらうと思うのですが、はつ子にとってのそれは、宗教でも、悟りでもありませんでした。あくまでも、生身の一個の人間として最期を迎えようとしたのだと思います。

確かに、はつ子は夫に対して、「この世においては、十分に満足で幸せであり、不平不満は何一つもない」と言ったかもしれませんが、病弱な夫や四人の子ども達を残して死んでいくわけですから、この世に未練がないはずはありませんし、むしろさぞかし無念であったことでしょう。

そして思うには、はつ子にとっておそらく最もつらく堪え切れなかったことは、死そのものの恐怖よりも、むしろ死ぬことによって、夫の愛を失うことにあったのではないのでしょうか。

だからこそ、体を求めてきたのではないかと思います。はつ子は、あくまでも生身の一個の人間として、己の生涯を終えたかったのではないのでしょうか。身と心とを合わせた全身全霊で夫の愛を感じて、はつ子は、はつ子の一生を終えたかったのではないかと思います。

そして、そういうはつ子の、命がけの愛を目の当たりにして、吉野秀雄は、「五体」を「震はせて感動したのではないのでしょうか。

こういう愛の極限を扱った文学は、日本文学の中においては、それこそ稀有な存在であると思われま

す。高校1、2年生には、まだ早いような気もしますが、しかし、3年生ぐらいには、考えさせる価値は充分にあるのではないのでしょうか。

話を元に戻したいと思います。前述した『やはらかな心』では、『南無阿弥陀仏！』と唱える以外、何もいひたくない」と述べた後で、吉野秀雄は山本健吉の文章を引用することで、自分の気持ちを代弁してもらっています。そして最後に「……わたしは照れて、これを書き取るに抵抗を感じたが、しかしこんなにも深く理解がえられたわたしのよろこびをこらすことはできない。」と素直に喜びの気持ちを表して、文章を締めくくっています。

次に参考資料として、その山本健吉の文章を紹介したいと思います。

古畳を蚤のみはねとぶ病室に汝がたまの緒は細りゆくなり
病む妻の足頸にぎり昼寝する末の子をみれば死なしめがたし
遮蔽灯の暗き燈かげにたまきはる命尽きむとする妻とあり
真命の極みに堪へてしむらを取へてゆだねしわぎも子あはれ
これやこの一期のいのち炎立ちせよと迫りし吾妹よ吾妹
ひしがれてあいろもわかず墮地獄のやぶれかぶれに五体震はす

吉野秀雄（『寒蟬集』）

命のきわみに震えつつ

これは作者の、「妻の死」の連作の中から抜いたものです。戦時中に先夫人がなくなったことは、灯火管制の「遮蔽灯」がよまれていることで、わかります。この連作で、われわれを瞠目させるのは、あとの三首です。これほど厳肅なものとしてよまれた男女交合の歌は、ほかにはないのです。しかも、そこには、そのことをおぼめかし、美化して歌おうとする配慮の一点の余地もないのです。その命の合体の一瞬に、いささかの享樂的要素もないのです。

何か根源の生命への欲求、愛情の極致ともいべきものに促された、せっぱつまった一つの行為であり、それゆえそれはこのうえなく厳肅なのです。

こういう歌はめったに作られるものではありません。こういう歌を作るには、やはり作者の大きな勇気がいります。人生の厳粛な真実に、おめずに立ち向かおうとする勇気です。そのため、わたしはあえてこれをここに上げました。

(山本健吉著『日本の恋の歌』講談社現代新書 1975年発行)

13. 今生こんじょうのつひのわかれを告げあひぬうつろせまに迫る時のしづもり (「玉簾花」1124)

〔歌意〕

妻と二人、お互いにこの世の最後の別れを告げ合うことができた。そしてその後うつろに迫る時の流れの静けさよ。

〔説明〕

この歌は、はつ子が亡くなる当日8月29日の宵の時に、「看護婦さんが風呂へいつたあと、しみじみと別れを告げ合ふ時間があつたのでできたもの」(『やはらかな心』)だそうです。

「看護婦はるなかつたし、手をとつて存分に別れを告げ合へたことをしあはせに思ふ。そのジーンと鎮しづもつた何分間かといふものは、空気が硝子がらすのやうに張りつめた感じでもあるし、また例へば地球引力が消滅してはてしなく無抵抗になつてしまつたかのやうでもあつた。かういふ複雑な印象が『うつろに迫る時のしづもり』で果して出てるかどうかは知らぬが、ともかく自分としてはこれで当時の自分の力の限りを尽くしたものである。」(『自註歌集 寒蟬集』)

「うつろ」は、①中身がなくからっぽなさま。②心の働きの鈍り、ぼんやりしているさま。(小学館『現代国語例解辞典』)の意ですが、しかし、「歌意」の中で、空っぽであるとか、ぼんやりしているという言葉を使うのは不適切であると思ひ、「うつろに」という言葉をそのまま使用しました。

「しづもり」も、どのように解釈したらよいか難しい言葉です。「①静かになるさま。②乱れや騒ぎが落ち着くさま。」のどちらかの意ではないかと思ひますが、①と②のどちらの意も、踏まえられているような感じもします。

「うつろに迫る時のしづもり」は、作者自身が『自註歌集 寒蟬集』で、「そのジーンと鎮しづもつた何分間かといふものは、……かういふ複雑な印象」であつたと言っているわけですから、それを「歌意」の中で簡単に言い表すのは、とても難しいことでした。一応「静けさ」という言葉を使ってまとめてみましたが、これでよいかどうか判断の難しいところです。

ただいずれにせよ、夫婦が今生の別れを告げ合うことができたという、神聖で濃密な時間を共有できたことに対する充実した思いが、詠み込まれているのではないかと思ひます。

それはある意味では、つらいとか悲しいといった現実的な感情が超越されて、夫婦の絆を確かめ合うことができた、愛の一瞬であつたのかもしれない。

現代の医療の現実からは、このような夫婦の別れは、なかなか困難でもあります。

14. 遮蔽燈しゃへいとうの暗き燈ほかげにたまきはる命つ尽きむとする妻つまと在り (「玉簾花」1125)

〔歌意〕

遮蔽燈しゃへいとうの暗く覆おおわれた燈火とうかの下で、今まさに命が尽きようとしている妻と私がいることだ。

〔説明〕

「遮蔽燈しゃへいとう」は、戦時中に米機の来襲に備えて、室内灯の光が外に漏れないように、黒い布で覆い隠された室内照明のことです。

吉野登美子著『わが胸の底ひに 吉野秀雄の妻として』(弥生書房 1979年発行)に、戦時下の

様子（ただし夏ではなく冬）を描写した箇所がありますので、次に引用します。

「当時はアメリカ機の本土空襲がはじまった時期で、時々警戒警報が出る。すると窓という窓を黒い布で蔽い、電燈も黒い布をかぶせて暗い部屋で家中が炬燵に当ってしんみりとしてしまうのであった。食糧難は深刻さを増し、皆栄養不足で顔色が青くなり、痩せほそってゆく。」

陰鬱でうす暗い病室の中で、命が今まさに燃え尽きようとしている妻と、その妻の死をじっと見守っている夫の二人にだけ、遮蔽燈の暗く覆われた灯りが当たっているというのです。

妻の姿と夫の姿を、遮蔽燈のうす暗く覆われた燈火によって、あたかもスポットライトに当たっているかのように、浮き立たせてみせることで、二人だけの世界を演出したのだと思います。

そして、「妻と在り」という結句からは、妻の人生の最期の時を、夫婦二人だけで迎えようとする夫の決意のようなものまでが感じられて、詠んでいて身が引き締まる思いがします。

「たまきはる」は、「命」にかかる枕詞です。

『自註歌集 寒蟬集』には、「結句のところ、はじめ『妻とわれ』とあったのを、『命尽きむとする』が『われ』にまでかかつては困るので、『妻と在り』と表現を直したことが説明されています。

15. をさな児の兄は弟をはげまして臨終の母の脛さすりつつ

（「玉簾花」1126）

【歌意】

まだ年端の行かない兄は弟を励ましなが、臨終近い母の脛を、二人の兄弟は懸命になってさすり続けていることだ。

【説明】

この歌は、吉野秀雄の歌の中でも最も有名な歌の一つです。

この歌に詠まれた情景は、はつ子の亡くなった当日の、8月29日の夜のことであることが、次に紹介する『自註歌集 寒蟬集』の中に書かれています。

はつ子が亡くなったのは、秀雄の日記によると、午後11時20分ですので、まさにその直前の兄弟の様子を詠んだものということになります。

「二十九日夜のありのままの写実である。当時十五歳の陽一が十二歳の壯児を声にはげましながら共に母の両脚を一本づつさすつてゐる。まだ子供の壯児は昼間の疲れが出てか、ややもすると眠くなりさすり方がゆるんで来る。それを陽一は年嵩だけに叱咤激励するといふわけである。『脚』（または『足』）といはずに『脛』といつたのが写生のよきであり、強みでもある。四人の子らは九時頃一旦うちへ帰し、あまりにも悲惨な息をひきとる場面を見せなかつたのは自分の親心である。十一時二十分に事終り、看護婦たちが屍体の処置をして後、十二時頃子らを電話で呼んで、はじめて死顔に会合させた。」（『自註歌集 寒蟬集』）

『自註歌集 寒蟬集』の中に書かれている兄弟の年齢は、共に数え年ですので、満で言えば陽一が14歳で、壯児は12歳です。やはり母を失うには、まだ早い年齢です。「玉簾花」1131番に、「亡骸にとりつきて叫ぶをさならよ母を死なしめて申訳もなし」という歌がありますが、思春期の兄弟の心に与えた母の死の衝撃は、察するに余りあります。

山口瞳著『小説・吉野秀雄先生』（文芸春秋 1969年発行）の中には、『創元』に発表された「短歌百余草」の、母はつ子の死の前後を詠んだ一連の歌に対する、次男壯児の次の話が紹介されています。

吉野壯児さんにとって、これらの歌は「涙」であるようだ。

「私が年少のころに失った母親の死の前後を詠んだ歌は、私に真実の作品のみがもつすぐれた喚起力ということを教えた。世人はそれを芸術の訴える力というふうに言うだろうが、『玉簾花』『百日忌』『彼岸』という一聯の作品は、私にとって、訴えるなどというなまやさしいものではない。あの作品は、私にとっては『涙』である。亡母の死顔も、水をふくませたあの唇も憶えているというのに、その情景だけを思い出しても、これだけ歳月が経ってしまうと、もう涙も出なくなる。しかし、父の作品を読むと、いまでも涙ぐんでしまうのだ。だから、私は父の歌集のあの部分は、なかなか開けようとしない。よみがえる悲しさがこわいからだ。」

(山口瞳著『小説・吉野秀雄先生』文芸春秋 1969年発行)

常識的に考えてみても、母の「脛」をさすったところで、母が生き返って来るわけではありません。しかし、そうするよりほかに、兄弟には術がありませんでした。協力して脛をさすることで、何とかして消えつつある母の命を、つなぎ止めようとしている、兄弟の必死な姿が浮かんで来て胸を打ちます。

上の吉野壯児氏の回想にもあるように、母の死は、何年経っても消えない心の痛手でした。

16. 母の前を我はかまはず^{こと}緯^{なれ}切れし^{くちづ}汝の口^{たますだれ}びるに永く接吻く (〔玉簾花〕1127)

〔歌意〕

妻の母が看取っている、その目の前であるにもかまわずに、私は今しがた息を引き取ったばかりのお前の唇に、長い間口づけをして別れを告げたことだ。

〔説明〕

この歌以降に掲げる三首の歌は、いずれも通夜の晩の折の歌です。

この歌に詠まれている「母」は、吉野秀雄の8月4日の日記の項に、「○四日。栗林の母来る。」とありますので、はつ子の母のことです。妻の母が見ている前ではあるけれども、見栄も外聞もかなぐり捨てて、息を引き取ったばかりの妻に口づけをして、永遠の別れをしたというのです。

そこには、愛する妻に先立たれた男の悲しみが包みかくさずに描かれています。

17. 隣室の患者^{りんしつ} 憚り^{はばか}声あげて泣きも得せず^{たますだれ}て苦しよわれは (〔玉簾花〕1128)

〔歌意〕

隣の部屋の患者に気がねして、声をあげて泣くこともできなくて、とても苦しいことだよ、私は。

〔説明〕

「苦しよわれは」と、妻を亡くした夫の気持ちが、素直に読まれていて、胸を打ちます。

宮沢賢治の詩に、妹とし子を亡くした際に詠まれた、「無声慟哭」という詩がありますが、そのタイトルの状況と同じような思いが詠まれたものかと思います。他の患者に対する配慮から、感情をあらわにすることははばかられますが、しかし心の中では、大声を上げて泣き出したい吉野秀雄でした。

18. 亡骸^{なきがら}にとりつきて叫ぶをさならよ母を死な^{まうしわけ}しめて申^{たますだれ}訳もなし (〔玉簾花〕1131)

〔歌意〕

母の亡骸にしがみついて泣き叫ぶ、年端も行かない子ども達よ。母を早くに死なせて申し訳ない。

【説明】

『自註歌集 寒蟬集』の、「玉簾花」1126番の歌「をさな児の兄は弟をはげまして臨終の母の脛さすりつつ」の説明のところに、はつ子が11時20分に息を引き取り、その後に「看護婦たちが屍体の処置をして後、十二時頃子らを電話で呼んで、はじめて死顔に会合させた。」とあります。

吉野秀雄が、母の死顔を子ども達に見せたのは、夜中の12時頃でした。

また『自註歌集 寒蟬集』のこの歌の項には、「深夜に子らを招いて、平静に屍体に敬礼させたところ、かういふ事実がおのづからもちあがつてしまった。」とあります。

「かういふ事実」とは、歌で詠まれている「亡骸にとりつきて叫ぶをさならよ」のことだと思えます。「をさなら」は、「をさなごら（幼児等）」の略かと思えます。

「母を死なしめて申訳もなし」というのは、「真情を吐露」したものだともあります。父の気持ちとして、正直なところだったのでしょう。

19. いのちありて汝が作りし南瓜とトマト供へて葬ひをなす (「玉簾花」1149)

【歌意】

命があった時に、お前が作ってくれた南瓜とトマトを供えて、お前の葬式を挙げたことだ。

【説明】

妻が生前作った南瓜やトマトを、妻の葬式の際に供えたというだけの歌かもしれませんが、しかし、生前妻はおそらく家族のために、南瓜やトマトをせっせと作っていたのだと思えます。

『自註歌集 寒蟬集』には、「春夏にも庭の畑作りにいそしみ、入院の前日にもトマトの手入れをしてゐた。」とあります。戦争末期の食糧難の時代ですから、妻が、己の死後に残された家族のために作っておいてくれた貴重な食べ物だったのです。

そして、そういう妻をいとおしみ詠んだ歌なのだと思います。南瓜やトマトというありふれた野菜ではありますが、妻との生活を思い出す大切な素材となっています。

「病室に寝てゐて何の不満も洩らさなかつたが、ただ『今一度うちの畑を見たい。』とはよくいつてゐた。九月一日の葬式の際、亡き者丹精の野菜をその骨壺に供へたことは、多少の感慨なき能はぬものであつた。」(『自註歌集 寒蟬集』)

南瓜やトマトを供えたのは、はつ子の葬式の時であったことがわかります。何気ない歌ではありますが、妻をしのぶ夫の気持ちが素直に伝わる良い歌ではないでしょうか。

20. 子供部屋に忘れられし太鼓とりいでて敲ちうつころ誰知るらめや (「玉簾花」1181)

【歌意】

子供部屋に忘れられてあった太鼓を取り出して、試しに打ってみたのだが、そんな（妻を亡くして悲しむ）夫の心を、いったい誰が知っているであろうか。いや誰も知るまい。

【説明】

「陽一が五つ六つの頃、高崎の父がその若松町で作られる太鼓を贈つてくれた。祭の囃子に使ふ大太の小型のやつだ。それが『子供部屋』といひ慣れてゐるごたごたした勉強部屋の片隅に転がつてゐたのをある日誰もみない時に引き出し、撥も一本見つけてたたいてみたといふのである。わたしは日本の太鼓の重たく沈んだ音を好むが、それはともかくとして、なぜそんな見戯を殆ど我知らずにしたかといへば、自分の憂悶のやり場がないからであつたに相違ない。」(『自註歌集 寒蟬集』)

上の『自註歌集 寒蟬集』にあるように、この歌は、妻を亡くしてどうすることもできないでい

る吉野秀雄の「憂悶のやり場のなさ」を詠んだものと思われます。

「誰知るらめや」は反語で、「いったい誰が知っているのであろうか、いや誰も知らないだろう。」の意です。孤独で悶々としている夫のやるせなさが、大の大人が、たった一人で虚しく太鼓をトントンと叩いている情景描写の中に、よく表れています。妻のいない現実を、知れば知るほど落ち込んでしまう吉野秀雄の姿が描かれているようで、哀感を漂わせます。

第四章 歌人としての評価

1. 師会津八一からの認知

1945年（昭和20）1月末から2月にかけて、吉野秀雄は空襲のさなかを、友人中村琢二、小池巖、近藤栄一らと共に、中伊豆へ旅行に出かけています。妻はつ子を亡くした翌年のことです。そして、その際に詠んだ「富士」の歌12首を会津八一へ送りますが、それらの歌に対して、八一から賞賛する返事が届きました。次に掲げた一連の歌は、その際、八一から賞賛されて、後に『寒蟬集』に収められた「富士」八首の歌です。

わぎのち 我命をおしかたむけて二月朔日朝明の富士に相對ふかも	（『寒蟬集』「富士」1303）
あさぎ きさらぎの浅葱の空に白雪を天垂らしたり富士の高嶺は	（同 1304）
たなぐもとほほ 朝富士の裾の棚雲遠延へて函根足柄の嶺呂を蔽へり	（同 1305）
かむ この岡の梅よはや咲け真向かひに神さびそそる富士の挿頭に	（同 1306）
かざし 富士が嶺の氷雲のひまを見据うればいただき近く雪げむり立つ	（同 1307）
ね 雪冴ゆる富士をそがひにあしびきの山松林風とよむなり	（同 1308）
ふたかた 富士が嶺のなぞへにはばまれて雲二方に別れゆくらし	（同 1309）
そばかど 富士の肩の雪の稜角くきやかにただ一息の線を張りたり	（同 1310）

さらに八一は、「お前ももはや世に出てよからう。発表の場所は心配してやる。」（昭和20年2月6日中村琢二宛手紙より）と言って、歌人として世に出ることを初めて認めてくれたのでした。吉野秀雄が歌を本格的に作り始めてから、実に約20年も経った後のことでした。

当然のことながら、吉野秀雄は大いに喜びます。「かくいはるは第一関門を曲がりなりにも突破せし許状を貰ひし心地にて大いに元気づき居候」（同中村琢二宛手紙より）

会津八一はこうして、当時八一自身が社長の立場にあった、「夕刊ニヒガタ」（後「新潟新報」）の歌壇選者に、吉野秀雄を推挙してくれたのでした。苦節20年、吉野秀雄は遂に師会津八一から歌人として認められたのでした。

2. 小林秀雄からの激賞

妻が亡くなった翌年から、吉野秀雄の運は急に開けてきました。あたかも、あの世からはつ子が導いてくれるかのようでした。

1946年（昭和21）秀雄44歳の年のことです。秀雄は、まず4月から鎌倉アカデミア文学部教授に就任することになりました（～1950年9月）。6月からは、前述した会津八一の推挙により、「夕刊ニヒガタ」（後「新潟新報」）の歌壇選者になることができました。そして12月には、『短歌百余草』を小林秀雄が編集する「創元」に発表することになったのです。小林秀雄が『短歌百余草』を絶賛したことは、前述した山口瞳著『小説・吉野秀雄先生』（文芸春秋 1969年発行）に詳しく

載っている通りです。

3. 歌壇からの注目

それから後の吉野秀雄の歌壇進出は順調でした。次は、その当時の吉野秀雄の活躍ぶりを説明した、「妻を哭する絶唱 文壇を震撼さす」と題した、歌人島田修二の文章の一節です。

1946年12月、小林秀雄の「創元」が創刊され、その創刊号に「短歌百余草」と題して、妻を哭する歌が発表されるに至った。敗戦後、まだ復興の途上にあった歌壇では吉野の名は広く知られているわけではなかった。そして、小林秀雄を先頭とする鎌倉文士たちの支持があって、吉野の名は一挙に歌壇にも浸透した。折しも小田切秀雄の「歌の条件」、白井吉見の「短歌への訣別」などの短歌否定論に揺さぶられていた時期であり、文壇に反響を及ぼしていた吉野の「短歌百余草」が、歌壇に与えた影響は少なからぬものがあった。吉野が会津八一に深く傾倒していたことも歌壇進出への大きな手がかりになった。八一もまた歌壇よりも詩壇・文壇に迎えられていた人であり、敗戦の時期に養女を失った嘆きを歌っていた。この師弟の悲歌は、短歌の世界に影響を与えずにはいなかったのである。

吉野の妻を哭する歌は、翌年歌集『寒蟬集』に収められ、さらに反響を呼ぶことになった。吉野はニューギニアで自決した米川稔の親友であった宮柁二との交友を深め、また白秋門下の木俣修の歌集『高志』と自身の『寒蟬集』との「互評自註歌集」の企画なども行われ、復興する戦後歌壇に参入、歌壇に従来の流派の順送りによる登用とは異なった形での歌人・吉野秀雄が出現することになった。

(『生誕100年記念展歌びと吉野秀雄』神奈川近代文学館 2002年発行)

第五章 まとめ

ひつさ
掲げし氷を置きて百日紅燃えたつかげにひた嘆くなれ (『寒蟬集』「玉簾花」1114)
ゆきあ 炎天に行遭ひし友と死近き妻が柩の確保打合はす (同 1117)

いずれも『寒蟬集』「玉簾花」の中の歌です。今回の教材では選びませんでした。吉野秀雄の代表歌です。

「玉簾花」1114の歌は、吉野秀雄が妻はつ子の氷を買いに行くために、毎日由比ヶ浜にある配給所まで行くのですが、その際の歌です。氷は、病人証明を持っていても、なかなか入手することが大変な時代でした。二貫目の重い氷の塊をバケツに掲げて、吉野秀雄はフーフー言いながら帰って来ます。一貫目は3.75kgですので、二貫目で7.5kgにもなります。途中で何度か休み休み戻ってくるわけですが、毎日のこととなると、大体決まった場所で休むようになりました。その場所は病院の通り沿いで、下が石垣になっていて、腰をかけて休むのにちょうどいい屋敷がありました。その屋敷の塀から、百日紅が枝を伸ばして、真っ赤な燃え立つような花を咲かせていたというのです。

この歌の前には、「幼子は死にゆく母とつゆ知らで釣りし魚の魚籃を覗かす」という、今回教材にも選んだ 1113番の歌がありますので、吉野秀雄は、既にはつ子の死を自覚していたことがわかります。そしてそのやるせない思いが、この歌の「ひた嘆くなれ」という結句に表れているのだと思います。

妻の死という重く苦しい現実を前にして、絶望感に打ちひしがれている夫の目の前に、燃え立つような百日紅さるすべりの真っ赤な色が飛び込んで来たというのがこの歌の趣旨です。

ところで、吉野秀雄は、若い頃に正岡子規の歌を詠んで衝撃を受けています。実際に根岸の子規旧居にも訪れて、子規の遺墨や妹律の話を聞いたりして深い感銘を受けました。そして、歌の作り方は、正岡子規の教えを受けた、伊藤左千夫、長塚節、島木赤彦、斎藤茂吉といったアララギ派の歌に多くを学んだようです。『自註歌集 寒蟬集』の中にも、「写生」という言葉がよく出てきます。

また、一方では歌を読み始めた頃に、会津八一の「南京新唱」にも心酔しました。八一のその歌集の中に、二首だけ意味がわからない歌があったので、その教えを乞うといったことがきっかけとなって、その後莫大な量の書簡を通して、八一からも歌についての多くを学んでいます。

また、後日吉野秀雄は、鎌倉アカデミアで万葉集の講義を担当していますが、その万葉研究に關しては、師匠の会津八一でさえも舌を巻くほどの博学ぶりでした。

こういった歌の学び方からして、吉野秀雄の歌の基本は、歌を象徴的に詠んだり、短歌という五七五七七の世界に、虚構の世界を新たに構築し直すといった読み振りではなかったようです。あくまでも現実のリアリズムの世界の中で、人間の苦悩や人生の懊悩を大胆にそして実感的に詠む込んでいくことによって、人生の真実や断面を鋭く切り取っていくといったところに、吉野秀雄の歌の特徴があり、また真骨頂たますだれがあったのだと思います。

こうして考えていくと、例えば、前述した「玉簾花」1114番の「ひつぎ 提げし氷を置きて百日紅さるすべり燃え たつかげにひた嘆くなれ」の歌についてですが、仮にこの歌だけを単独に与えられて、鑑賞を試みたならば、真さるすべり赤に燃え立つ百日紅の花に、ともすればはつ子の消えゆく命であるとか、はつ子の無念な思いが、象徴されているのではないかと解釈したくもなるのですが、おそらくそれは考えすぎであると思われる。

吉野秀雄は、あくまでも現実に見たものを「写実」的に客観的に詠むことによって、その背後に横たわる人生の奥深さや、事実のみが持つ気高さや尊厳といったものを、詠む者に訴えかけようとしているのだと思います。

つまり、そこが吉野秀雄の歌の特色でもあり、悪く言えば限界でもあるとも言えるのかもしれませんが、しかし、そのリアリズムが、時としては人の心をグラグラと揺さぶります。

炎天ゆきあに行遭しにひし友と死ひつぎ近かくき妻がほうちあ 柩の確保打合はす

「玉簾花」1117番のこの歌は、8月22日のことであることが、『自註歌集寒蟬集』の中に載っています。戦時中のことなので、木材の逼迫ひっぱくから、棺桶かんおけさえも亡くなってからすぐには手に入らないというので、いつも日常の世話を頼んでいる新聞記者の友人に、妻の「柩ひつぎの確保かくほ」を依頼したという歌です。

「柩ひつぎだけは分厚な板の一番いいやつにしたいとくれぐれも頼んだことを忘れない。死なねばならぬとはいへ、いつ死ぬかわからぬ者の柩あつらをいち早く逃あつらへるなどいかに無慈悲な話だが、実に止むを得ざるに出でたのである。」(『自註歌集寒蟬集』)

妻を死なせたくないと思うのは当然のことなのですが、しかし一方では、不慮の場合に備えなくてはならないのも夫として当然の務めでした。妻の死を認めたくないはずなのに、一方では妻の死の準備をしなければならないことの矛盾。友と相談しているその吉野秀雄の頭上には、炎天の太陽の光が、情け容赦なく照りつけていたのでした。

そういう精神的にも肉体的にも疲れ切った夫の姿が描かれていて、この歌も詠む者の心をつかんで離しません。

こういう事実であるが故に感じる迫真力は、『寒蟬集』全編を通じて感じられるものです。

ところで前にも書きましたが、吉野秀雄は、なかなか歌人として世に出ることを認められませんでした。それは師会津八一から、「ひたすら孤高の詩心」を守ることを、厳命されていたからです（『寒蟬集』後記より）。

そして、ようやく八一から歌人として世に出ることが許されたのは、歌を詠み始めてから約二十年が経った、1945年（昭和20）の吉野秀雄43歳の時でした。

歌人としては、随分と遅いデビューではないかと思われそうですが、吉野秀雄の喜びが、それ故に相当なものであったであろうことは、想像に難くありません。

こうして吉野秀雄は、永年蓄え続けて来た思いを、一気に爆発させるかのように、歌を詠み出します。歌を求められれば、相手構わず拒むことなく応じました。そうしてその数は、一年間に四百余首という数にのぼったといえます。

『寒蟬集』は、『創元』『人間』『象徴』『群像』『苦楽』『知慧』『創造』『文芸春秋』『新生活』『新風』『知音』『婦人文庫』『女性』『婦人朝日』『婦人画報』『週刊朝日』『毎日新聞』『読売新聞』『夕刊新潟』『夕刊大阪』等の雑誌や新聞に発表していたものに、さらに補作したものを加えて出来上がったものでした。題字は、会津八一が揮毫を寄せてくれました。

こういう歌人として、まさに世に出ようとする矢先に、はつ子は亡くなったのでした。

歌を詠みたいというエネルギーと、愛してやまない妻の死の衝撃とがぶつかり合って、吉野秀雄のこの珠玉の作品ができ上がったと言えるのではないのでしょうか。

それは、現実であるがゆえに美しく、現実であるがゆえに悲しく、現実であるがゆえに読者の心に響いて来ます。まさにリアリズムの世界の有する醍醐味や迫力を、吉野秀雄のこれらの作品は私達読者に訴えかけて来るかのようです。

そして、この吉野秀雄の、妻はつ子の死の前後を詠んだ一連の歌は、きっと今の高校生にも多くの衝撃と深い感銘を与えてくれることでしょう。

『寒蟬集』後記には、吉野秀雄自身が次のようなことを述べています。

「もしも自分に自分の歌がなく、自分の歌が自分の精神を昂揚することがなかつたならば、どうして自分に今日の存在があつたらうか。」「歌を、たまきはる命かけて詠み出づることによつて、自分の懊悩を客観ならしめ、よつてからうじて生きゆく意志にかい縫ることができた。」

この言葉も、きっと高校生の胸の内に何かしらの波紋を投げかけることでしょう。

そして、前述した吉野秀雄の言葉からは、歌が作者にとってどのような存在であるかを、我々にも教えてくれます。

歌を詠むことによつて、初めて自分自身を客観的に眺めることを可能にし、そしてそのことによつて、かろうじて現実の苦しみや悲しさから、救われることができたというのです。そして、そういう作者のものがき苦しんだ体験の中から、初めて珠玉のような美しい芸術が生まれて来ることを我々は知ることができるのです。

家族とは何か。夫婦とは何か。そして、愛とは何なのか。なぜ男女は体を求め合うのか。

吉野秀雄の歌からは、これら人間が現実生きていく上での生の諸問題を、我々詠む側にぐいぐいと突きつけて迫って来ます。

避けられない病に対する妻の苦しみや絶望感、愛する妻を失う夫の痛哭^{つうこく}の思い、協力して母を看病する兄弟愛、母を思う子、子を思う母、そして確かな絆で結ばれた夫婦の愛情。

これらの歌に詠まれた現実を目の当たりにして、思春期の彼等はどう感じ取るでしょうか。芸術の本質がヒューマニズムであるとするならば、高校生にとって、これほど格好な教材はないのではないかと私は思っています。

吉野秀雄自身は、連作についてあまり肯定的ではありませんでしたが、これらの詩を、連作として授業で扱うことも十分に魅力があるのではないかと思います。ストーリー性があった方が、むしろ高校生にとってはわかりやすいのかもしれませんが。

上記に挙げた問題を考えさせるために、今回は、吉野秀雄の歌集の中でも、特にその特徴がよく表れていると思われる『寒蟬集』に絞って考えてみました。

何か授業のご参考になれば幸いです。

参考資料

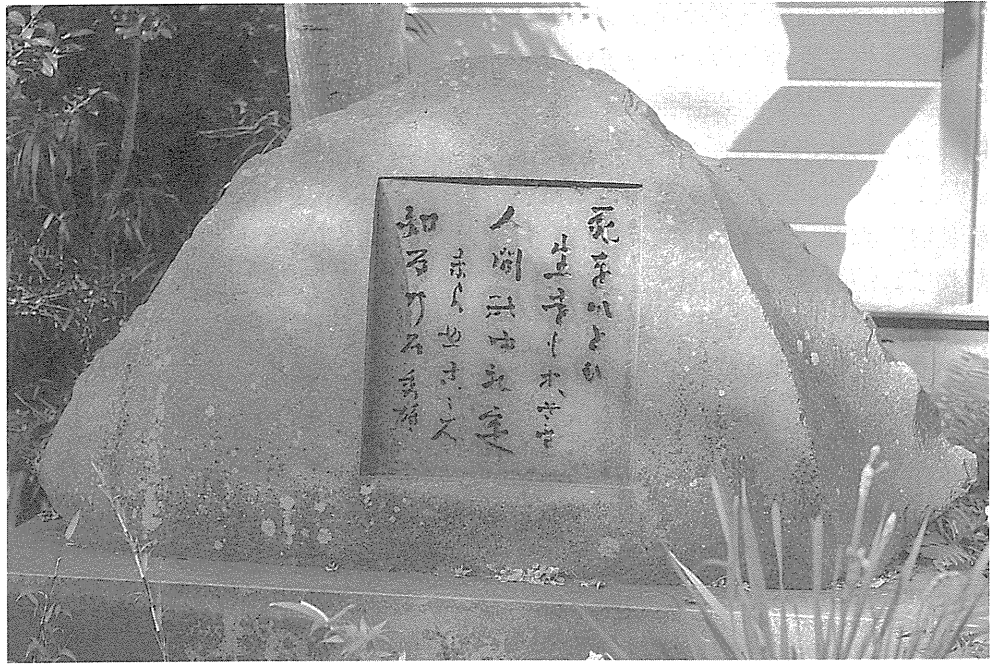
1. 略歴

- 1902年（明治35）群馬県高崎市に、吉野藤一郎、サダの次男として生まれる。生家は絹織物問屋・吉野呉服店。
- 1909年（明治42）7歳、富岡上町の祖父母のもとに預けられる。兄と共に富岡尋常小学校に通う。
- 1910年（明治43）8歳、この頃、栗林はつ子を見初める。
- 1915年（大正4）13歳、高崎の家に戻り、高崎商業高校に入学。はつ子高崎高等女学校に入学。
- 1920年（大正9）18歳、慶應義塾大学理財科予科1年に入学。はつ子に初めて手紙を書く。
- 1921年（大正10）19歳、父藤一郎が栗林家を訪問。はつ子との交際の許可を得る。
- 1922年（大正11）20歳、慶應義塾大学経済学部に進む。はつ子日本女子商業学校入学。
- 1923年（大正12）21歳、関東大震災で吉野藤東京支店全焼。子規旧居を訪問する。
- 1924年（大正13）22歳、喀血して帰郷。大学中途退学。本格的に歌を詠み始める。
- 1925年（大正14）23歳、会津八一の『南京新唱』を読み傾倒する。鎌倉七里が浜の鈴木療養所に転地。長谷の光則寺付近にはつ子と住む。
- 1926年（大正15）24歳、気管支喘息発病。会津八一に初めて手紙を送る。鎌倉で、栗林はつ子と結婚。高崎へ戻る。私家版歌集『天井凝視』出版。
- 1927年（昭和2）25歳、長女皆子誕生。痔瘻術後に大喀血。
- 1929年（昭和4）27歳、男子誕生後まもなく死去。
- 1930年（昭和5）28歳、長男陽一誕生。
- 1931年（昭和6）29歳、肺炎を患う。鎌倉市小町に転居、以後永住。
- 1933年（昭和8）31歳、次男壮児誕生。吉野藤の東京支店に勤め、月刊誌「吉野藤マンスリー」の編集にあたる。初めて会津八一と会う。
- 1936年（昭和11）34歳、次女結子誕生。歌集『苔径集』出版。
- 1937年（昭和12）35歳、赤痢で入院。
- 1944年（昭和19）42歳、8月29日、妻はつ子、鎌倉佐藤病院で逝去。享年42歳。
11月八木登美子、子ども達の教育のために吉野家に入る。
- 1945年（昭和20）43歳、会津八一から歌人として世に出ることを許される。喀血。太平洋戦争終戦。母サダ逝去。

- 1946年（昭和21）44歳、鎌倉アカデミア文学部教授就任（～1950年9月）。会津八一の推挙により、「夕刊ニヒガタ」（後「新潟新報」）の歌壇選者になる。12月、『短歌百草』を「創元」に発表。
- 1947年（昭和22）45歳、4月長女皆子結婚。8月『鹿鳴集歌解』出版、10月『寒蟬集』出版。10月八木登美子と再婚。11月『早梅集』出版。
- 1949年（昭和24）47歳、『互評自註歌集寒蟬集』『互評自註歌集高志』（木俣修と共著）出版。
- 1952年（昭和27）50歳、神奈川歌人会発足、以後実朝祭世話役講演等行う。『良寛歌集』出版。「砂丘」創刊、選者となる（～1967年6月）。
- 1956年（昭和31）54歳、喀血。糖尿病併発。会津八一逝去。
- 1957年（昭和32）55歳、『良寛和尚の人と歌』出版。
- 1958年（昭和33）56歳、『定本八木重吉詩集』編集刊行。『吉野秀雄歌集』出版。
- 1959年（昭和34）57歳、『吉野秀雄歌集』により読売文学賞受賞。喀血、糖尿病のため病臥。八木重吉『花と空と祈り』編集刊行。
- 1960年（昭和35）58歳、遺言書作成。長男陽一手術。
- 1962年（昭和37）60歳、気管支喘息、呼吸困難、喀血。次女結子結婚。糖尿病悪化、リュウマチ悪化。
- 1963年（昭和38）61歳、6月～毎日新聞に「心のふるさと」連載開始。糖尿病悪化。
- 1965年（昭和40）63歳、長男陽一精神を病む。
- 1966年（昭和41）64歳、『やわらかな心』出版。狭心症、呼吸困難で危篤になる。
- 1967年（昭和42）65歳、『心のふるさと』出版。第1回釈迢空賞受賞。7月13日、午前11時58分逝去。戒名、艸心堂是觀秀雄居士。『含紅集』出版。
- 1968年（昭和43）、「含紅集」その他により、芸術選奨受賞。7月6日、第1回艸心忌。瑞泉寺で歌碑除幕。

2. 参考文献

- ・『吉野秀雄私稿』松原信孝著 短歌新聞社 2004年発行
- ・『わが師わが友』山口瞳著 河出書房新社 2004年発行
- ・『百年の恋』道浦母都子著 小学館 2003年発行
- ・『増補改訂版 吉野秀雄全歌集』吉野秀雄著 宮崎甲子衛編 短歌研究社 2002年発行
- ・『生誕100年記念展 歌びと 吉野秀雄』神奈川近代文学館 2002年発行
- ・『會津八一・吉野秀雄』群馬県立土屋文明記念文学館 1997年発行
- ・『わが胸の底ひに 吉野秀雄の妻として』吉野登美子著 弥生書房 1979年発行
- ・『吉野秀雄歌解』木村聰著 彌生書房 1978年発行
- ・『やわらかな心 吉野秀雄』吉野秀雄著 講談社文庫 1978年発行
- ・『吉野秀雄の秀歌 鑑賞』片山貞美著 短歌新聞社 1977年発行
- ・『定本 吉野秀雄全歌集』第1巻～第3巻 吉野秀雄著 弥生書房 1977年発行
- ・『日本の恋の歌』山本健吉著 講談社現代新書 1975年発行
- ・『吉野秀雄全集』第1巻～第9巻 吉野秀雄著 筑摩書房 1969年発行
- ・『小説・吉野秀雄先生』山口瞳著 文芸春秋 1969年発行



「死をいとひ生をもおそれ人間のゆれ定まらぬころ知るのみ 秀雄」
(鎌倉瑞泉寺山門前にある吉野秀雄の文学碑)